

我兒は清く美しく、

あるべき事を忘るゝな、

其うつくしき訪問者ご、

ひごしく其身をなさんには、

併し愛兒よ爾には絶えず來客あるなり清き日光も、光る星も、牙え渡る月も皆爾を愛して爾を見んと願ひ居れり、

彼等は好みて愛らしく、

清き我子をたづね來ぬ、

されど我子よもしや汝が、

清くあらずばかゝやける、

彼等は爾をいごひつゝ、

彼等も爾も諸共に、

いごご不快を感ずべし、

されば我子よ我愛よ、

爾何處に行くごても、

ゆめ怠りぞ清淨を、

其身をきよくなすごを、

ご今此圖を見るに恰も五人の兒童が時計を弄して遊つゝあるなり此兒童は正に善く其時を追ふて其爲す可き事をなし得んが爲め時を知らんとを欲する五本の指を表すに似たり來れ我兒の愛らしき五指よ、來て圖中の五童の爲す所を學べ

●草刈の遊

(第二十二三ページ)

腕の運動

先づ小兒の兩手を出さしめ其前腕を水平に伸ばし、掌を下に向け、指を少しく揚げて下方に屈曲せしめ又母は掌を上に向け其他は全く相同じき姿勢を爲し而して母子双方の兩手指を相接せしむべし此の如くにして後此双對の腕を同時に均しく前後に動かすご草を刈るが如くなす可し此の如くするごきは此の遊戯は特に前腕の關節を運動し且つ小兒の姿勢を眞直ならしむるの効あるなり、母たる者が凡そ諸般事物の中外觀上直接に小兒に關係なきものは其内實に於ても亦相關聯する所なしご思考し絶えて人生の大連鎖の全體を洞看し得ざるが如き僻陋膚淺なる事程小兒の幸福特に其心情の教養に損害あるごは非なるなり聰慧なる母は既に前章の遊戯に由りて此損害を避くるの用心あるを得べし母よ余は空腹になれりご小兒が呼ぶごきには宜しく厨房に往て食を得可しごか又は此に二錢あり宜く麵包を買て來るべしごか生涯の間に幾度か言はざるを得ざる可

し母が此の如き言を爲す以前に既に成る可く早く満足せしめざる可らざる小兒の需要之に應ずるに必須なる事情この關聯を明白に理解せしめざる可らざるなり、

而して此等の關聯を明白ならしむる爲めには閑靜和樂なる田舎の生活又は繁劇多忙なる都市の生涯等凡て農工商業に關する美麗なる圖畫を擇びて之を集め之に簡短なる實話を加へて小兒に示しなば能く其目的を達するを得可し今此に集めたる圖畫に就て左に少く之を説明す可し、

若し小兒が此の圖の説明を求むる時は此歌と圖とに由りて其甘味きパンを喫し其雪白なる牛乳を飲むを得るは常に母君と牛とパン焼く人との惠によるのみならず是實に萬物に生命を賦與し常に之を保護り玉ふ萬物の父の恩恵に出づる事なれば常に之に感謝せざる可らずてふ事を教ふるは決して困難には非る可し、

世界は實に天父の意匠に由りて雨露あり晝夜あり四季あり地は之に由りて牧草を生じ牧草は動物を養ひ動物は人類を養へり小兒をして此理を知らしめなば必

ず天父の恩恵を感知するに至る可し且つ圖に示せる如く小兒をして大人が生活の爲めに爲す労働を眞似せしめ特に逐次に其小き花園を自己のものとして耕さしめ植物の熟するに及び其實を穫せしめ實際雨露日光の生物に及ぼす勢力の如何に擴大なるかを察し地と萬有を統轄する神の律法を知らしめなば更に一層感謝の念を加ふるなるべし、

たごひ兒童が今日は尙ほ此圖の下方に在りて跪いて乳樹の花に結べる鏈鎖を引く所の彼の童男童女の未だ全く其鏈環を結び終る能はざる如く其生涯の鏈鎖を完結して其一貫の理を悟ること能はざるも焉ぞ知らん異日智力の大に進歩し思考力の益發達するに及びよく此一貫の眞理を發見して其奧義に通ずるを喜ぶの日なきに非るを童男の傍らなる左の樹は彼及其他の教育を受く可きものに謂て曰く「注意せよ、注意せよ、生來善良なる根幹より下賤卑劣虚偽欺騙の惡芽を生ぜしむる勿れ、否らざれば之れより出るものは唯枯萎したる枝にして徒らに乾燥無味の實を結ぶの外、何物をも生ずること能はざらん」童女の凭る所の右樹は彼女

及其他の成長の途にある小兒に謂て曰く「注意せよ、注意せよ、不學と無思慮とに由りて將に伸びんとする生命の絶頂なる活ける注意を剪り止め將に發達せんとする萌芽を毀傷ふ勿れ、否らざれば幹太く枝伸び葉繁るこも遂に花を開くことなからん、況んや實を結ぶことをや」と然るに此童男童女は何故樹を背にして坐るや、哀しひかな此樹の教ふる大切なる教訓は此經驗なき童男童女の心裡に一の反響をも起すこと能はざるなり、母よ母よ卿は何事にてとも兒童の注意を惹くものは其害悪ならんかを恐るゝに及ばざるなり、特に母と共に健腕を振て草を刈る快活なる童男と枯草を積みたる車を追ふて走る活潑なる童女とには更に氣遣ふ所あるを要せざるなり、



● 雛を呼べ (第二十四、五ページ)

此に母と兒が手招きを爲すの状を爲し居るは別に説明の要なし此の如く手指を動かすに由りて兒は其手指の強壯と巧鍊とを得るなり、母は前章の説明を記憶するなるべし、見よ母の腕に憑る強壯にして肥え太りたる嬰兒が母の招き止めたる雛兒に凝視し居るを、思ふに今母は其兒を戶外開豁なる所に携へ行き新鮮なる空氣に浴せしめ所有外界の諸物に接して彼の内に有する新生命を明白に知覺せしめん、欲するに似たり、其時他の群兒も亦其娛樂を共にせん、さて母に追隨し行けり、此の如く愛情の溢るゝ慈親に追隨するは誰れしも好む所なり、兒童に在ては特に然り、見よ如何に健康と愉快と思慮深き性が此群兒の顔面と舉動とに溢るゝかを、圖の右側に三兒あり、其中央に在るものは跪つきつゝあり、清新なる天然の生命は如何に磁力の如く彼等の心を惹くよ、二人の小女の後ろに立てる健康なる兒は雛に全く其心を奪られ、其娛樂を獨り此二童女と共にするのみを以て満足せず、更に顧みて樹邊に快活に遊び居る他の三兒を招かん、とせり、然れども彼等も亦其眼

前に在て彼等の心を惹く所の景色に心を奪れ其場を去るを好まざる様に見ゆ。又圖の左側を見るに一兒は群雛の舉動を一つも見失はざらん。勉むるもの、如くひたすら其身を前方に屈し仔細に群雛の遊び戯る、を眺め居り、又一の童女は何物かを愛撫したしこの願望あるが如く熱心に母鶏を呼べり、之は母鶏が其雛の何れかを残し去らんことを恐るればなり。此の如く群兒は各自銘々天然の明鏡に照して我に在る生命を映寫し之を知覺することに由て更に我が生命を強むること宛かも嬰兒が其慈母の眼中に自己を映寫し而して之を知覺して更に其生命を強むるが如し。さらば凡ての子女は須らく此童女の傍らに清らかに又勇ましく攀ちのぼる蛇麻の蔓の如くいと快活に生長し遂に將來に於ては今此に在る子が其清蔭に就て天然の生命を樂み居る此亭々たる大樹の確然搖動せざるが如く泰然樹立する所なかる可らざるなり。

● 鳩を呼べ (第二十六七ページ)

大抵の母は小兒と共に坐するに當り常に其兒か己の腕に抱かれ居る際屢目撃せる事物を摸して遊び以て其兒を喜ばさん。つとむる者なり。母は鳩又は他の鳥雀が小兒の方に跳舞し來るを表はさん。爲め其五本の指を以て交々机上を打ちつ、漸次小兒の方に近くなり、小兒は之に心を惹かれ遂に其動作を眞似するに至る。此の如くして知らず識らず手指の關節を運動することを始むるなり、生命は能く生命を牽引す。前回に於ては吾人は天然の生命が能く小兒の心を牽引するを見たり、此の如く今は天然の生命特に鳩若しくは雀の生命が小兒の愛らしき生命と相牽引するを見るなり。見よ如何に馴々しく鳩が小兒の傍らに來るか。實に彼等は互に言語を了解し得るもの、如く見ゆ、彼等は互に其言語を了解し得ざる爲めに反りて更に互に深く相知る所あるもの、如く四方より彭翼しつ、小兒の周圍に集れり。鳥雀能く小兒の言語を曉るに非るなり、然れども亦互に深く默契する所のあるに似たり。小兒の母に於ける往々亦斯の如きあり。小兒未だ母

の言語を解する能はざるごき反て能く母に従順なること往々あり。是れ抑何の故ぞ、鳥雀に往て其理を問はんか、是れ他なし言語と實物、實物と言語、行爲と言語、言語と行爲、彼等に於ては同一義にして更に異なることなければなり、

● 魚

(第二十八九ページ)

小兒は母の左腕に抱かれて膝蔽の上若しくは母の前なる「テーブル」の上に坐す此時母は其兩手を地平の位地に伸して稍相平行せしむべし、斯くて其手指を別々に或は曲げ或は直くするごきは魚の游泳の狀を摸するを得るなり、今此遊戯の意味を布衍して之を左に述べん、  
小き鳥と小き魚とは共に小兒の心を尤も喜ばしむるものなり、其理蓋し鳥の空中に於ける魚の水中に於ける何れも其周圍に在て其運動を空碍するものなく無碍自在なるが如く見ゆるに由るに非るか、此無碍自在なるごきは兒童に對して

は實に名狀す可らざる價值ありて深く兒童の心を引く力あるものなり、分明自由、潔白及び無碍自在の運動、此等は實に兒童生涯の歡樂の基礎にして兒童の幸福と感ずる所は此に在り、其身體の強壯を増し其全身の開發を促す所亦此に在るなり、然れども小兒は何れも小鳥を捕へ小魚を漁するを好むに非ずや、此嗜好は此の自由を愛し自動を樂しむ本性と相戻るなきやの嫌なきにしもあらずと雖ごもこれ亦決して然らず小兒は其無邪氣にして潔白なる心より唯小鳥を捕へて其快活なる飛舞を得、小魚を獲て其壯勇なる游泳を得、此兩者の自由にして活潑なる自動と自決とを自家に得有せんご欲するの意に外ならざるなり、是れ小兒が好んで魚鳥を捕獲する所以ならんか、然れども眞正の不羈自由は決して斯の如く唯外物を捕獲せしめてこれに由て決して得らる可きに非るなり、自由の存在は之を我内より得ざる可らず、小兒の喜ぶ所の潔白は唯努力して之を内に得可きのみ、さらば卿若し潔白を其兒に得せしめんご勉むるごきはたごひ其始めは朦朧たる天性の萌芽に止まるも終には其兒の爲めに内部の平和と眞成の歡樂の基礎を限りなく据

ゆることを得可きなり。卿は須らく此目的の爲めに小兒の無邪氣なる欲望即ち潔白はくくわくの快活なる活動はたかを欲するの念を利用せざる可らず、

小さき妹は其兄を呼んで「兄上よ私の爲めに其處に勇しく泳で居る彼の小魚を捕へ玉へ、アー彼處に、アー此處に、アー今曲れり、アー今眞直になれり、此は實に可愛らしき魚なり、若し私が此の如くに自由自在に出没隠現、去來意の如くなるを得ば試みに阿兄を困却せしめて見ん、阿兄希くば一尾を捕へ玉へ」兄ソレ一尾を得たり、緊つかりと握らざれば逃げ失すべし「妹阿兄よ、魚は既に動かざるなり、唯眞直に其體を伸ばし居るのみ然れども尙ほ生きて腮を動かさし居るなり、草の上に置かば再び動くならん、ア、既に棒の如く硬くなれり、彼の強壯なる運動は既に那邊に去りたるか」兄「諸は妹よ未だ左の詩を知らざるか」

「魚の住家は

水の中

うきつしづみつ

うつくしく

力いだして

泳ぐなり

眞直におよぎ

折れ曲り

心々のおよぎかた

なれたるさまの

たのしさよ、

直すと曲まと此辨別は我愛する小兒の生涯に實に緊要なるものなり、彼人は直くなる人なり、彼の所行は直くなる所行なり、彼れの性格は直くなる性格なり、彼れは直くなる道を踏めり、彼は直なる思想を有し直くなる言を吐く、此等の事は兒童と雖いども之を聞くに喜ぶなり、然れども彼は曲りたる道を踏む、予は曲りたる事を好まず、此の如く曲なる言辭は如何に人に不快を與るか。さらば幼稚の時より早く曲直の別を明瞭ならしむるは兒童に取て最も緊要なる事と謂ふ可し、畫工の畫くや又曲直の觀念あり、小兒の遊ぶ溪水の流草木の生長蛇の匍匐皆曲直あらざるなし、若し兒童をして夙つに曲直の辨別を明確にし併せて曲即ち不正直は不幸を來たし直即ち正直は幸福を生むの母たるを悟らしめば小兒の心自ら正直に、其一舉一動皆正直なるに至らん、是に於てか、其生涯や小魚の水中に游泳して自由自在なる

が如く樂き生涯となるべきなり、

● 的……縦横 (第三十三十一ページ)

此遊戯は是迄の遊戯に比すれば特に斬新にして小兒發達の順序中最も重要な部分  
分を占むるものさす、何となれば何れの地方に於ても此遊戯の骨子を見出さざる  
なく、此遊戯は實に兒童を誘引して智識と實業の生涯に導き入るものなればなり、  
今小兒をして母の前に立つか、或は坐せしめ、其右手又は左手を地平線と平行に前  
に伸張さしめ、小兒の食指か又は母の食指を以て小兒の掌中に十字線を畫き其二  
線相交又する點に高指を以て錐もみする形容をなし尙ほ同指を槌として釘を打  
ち込むが如き様をなさしめ、かくて歌を唱ひて母の手掌を平たく其上に置くべし。  
題詞を一見せば既に此遊戯の意味を了るを得ん、然れども今其一二の點を更に明  
白に説明すべし、既に言ひし如く何故に此の遊戯は種々の形狀を以て各國各地に

普通に行はるゝか、蓋は吾人は此遊戯に於て位置物の所在と形狀物の形とに關す  
る最始の觀念を發見するを得べく、而して此觀念は實に事物の觀察上に缺く可ら  
ざる秘訣なればなり、縦横の二線相交又して一線は垂直に一線は地平に其位置を  
占むるが如く、而して其相交又する所に四個の角度成る、其角度皆相同じきを以て  
亦皆直角なり、斯くて此二線は其角の四端と共に同一平面上に在るは既に手掌  
にて示したるが如し、母或は云はん予と雖も斯る六ヶ敷言辭は了解すること能は  
ず争で我兒にして之を解せんやと、然り實に然り、かくの如く小兒に語るも小兒は  
未だ其言辭を解し得ず、然れども既に事物に關する預覺を有し居るなり、否らずん  
ば争で此遊戯を好まんや、されば母たるものは事物の知識は言辭の知識よりも更  
に近く小兒の心に存し、深く小兒の心に潜み、早くも自然に小兒の心に發生するも  
のなるを知る可きなり、故に實物を以て小兒を教育するは言語を以てするに優る  
幾層倍なるを知らず、さらば自然法に則りて最も有効なる教育を實施せんには須  
らく此に注目して間接に書籍若しくは言語を用ゆるに代へ實物と行爲とを以て

直接に天真を開發せざる可らず、此教育法の其成果の恒久なる所以は實に親しく目撃せしものは一層強く明白なる印象を人の心に刻するものなるを以てなり、小兒は既に特種なること、普通なること、及び兩者を自己との關係此三者の常に相連結せるを感知せしもの、如し

何物か まだ稚兒は 知らねども 二の棒と板一つ 合せし的は こと、にあり 後には小兒の 注意より はなれぬ的を ながめつゝ 心の中に かくれたる つよき思想を 呼出しぬ  
二つの棒と板一つ 一つの的となりけり ことどもそれを 見習ひて その目の前に 三つのもの つなぎ合せて 末終に 數も形も大きさも 同じ的をぞ作りける

此圖を畫きしものは小兒に此意を説明せんご意を致せしもの、如し三人の射手は全一の的鵠を指し、的を持ち行く三兒も亦同一の願望を以て滿され居るなり、

●菓子採

(第三十二三ページ)

此遊戯は普通に行はるゝ、遊戯にて英國及び他の國々にては其種類夥多あり、而して其廣く各國に行はるゝを見れば以て何處にても母たる者は其本能自然の性により、百方小兒自然の要求なる肢體の運動を遂げしめんことを勉め且つ其爲す所をして人生の實際に關係あるものたらしめんご期する事を徴見するに餘あり加之是より推して考ふるときは從來小兒の教育に關し母及一般の人々が本能性に基て唯偶爾に支離の形を以て行ひ來りしものを取て反省思察の光に照して之を精化し以て確乎たる理由の上に立ち全體に論理的の關係を有する完全なる教育法となすの必要あるを悟るべきなり、  
小兒は前章の如く母の前に立ち或は坐し、母は其小さき兩手を把り其兩掌を合せて拍手せしむ斯くして此遊戯始まり以て全腕を運動習練することを得るなり元來此遊戯たる小兒の其腕を用ふるの必要を感じ活動を好むの嗜好あるより起りしものなれども其結果や遂に知らず識らず生活上の關係に彼を導き至らしめざ



るを得ざるなり。試に思へ小兒が慈母の手より「パン」又は其好む菓子を得て之を食せんには先づ「パン」焼人の之を焼くあらざる可ず、さらば「パン」焼人は母の愛と小兒の嗜好とを連続する媒介にして生命聯絡の鏈環なり。然れども是れ唯一無二の鏈環に非ず、又固より其最後の鏈環に非ず。若し能く機會を把握して巧みに此遊戯を利用せば此生命聯絡の脈をたどりて遂に最後の鏈環に達し萬物に於ける天父の恩恵を小兒の心に明確ならしむるを得るなり。何となれば磨者粉を磨かざれば麵麩焼人其「パン」を焼くを得ず、農夫穀物を收穫せざれば磨者其粉を磨くを得ず、地穀物を産せざれば農夫穀物を收穫するを得ず、天然相和合して其生々の化を遂ぐるに非れば地穀物を産するを得ず、神勢力と物質とを備へ一定の經綸以て之を統るに非れば天然相和合して其生々の化を遂ぐる可き能はざればなり、  
 麵麩を焼き以て之を食ふの遊戯を爲す所の小兒は既に此等の觀念を以て生長し來りしや明なり。専心一意に戯るゝ小兒の遊びを妨ぐる勿れ。もし小兒の意中に存する精神に同情同感となる能はずば寧ろ放任して之れに干渉せざるこそよけれ

此遊戯や決して純白聖潔なるものを誘ふて卑陋なる外部的の生活に墮落せしむるものに非ず。反て此外部的遊戯に由りて更に之に心靈的の意味を附し之を聖別して高尚ならしむるものなり。若し其無邪氣なる遊戯に自由を與ふるなくば今も後も生涯如何にして輕快にして無邪氣なる中に其神聖なる品格を涵養することを得んや。然れども此の如きは唯親愛なる母の目と懇切なる母の口に由りて小兒の生命の至聖所より發したる無邪氣を善導するに由てのみ完成するを得可きなり、

●鳥の巢 (第三十四五ページ)

母先づ獨り其手の形容を示し次に其形容を反覆して、兒をして之を摸せしむるの方法は圖解に於て明かなれば唯一言を加へて止むべし、  
 今此遊戯を始むるに當り兩掌を合せて之を鳥巢に摸し兩拇指の指頭を掌中に没

して唯下方の關節のみ見る可らしめ以て巢中に在る二個の卵に擬し而して二羽の雛よ全時に孵化せよとの呼聲に應じて其拇指の頭を擡げて二雛の頭の如く見せ斯くて「ピーピー」雌鳥の呼ぶを聞けと云ひつゝ、宛も雛が親鳥を尋ぬる如く其兩拇指を動かすべし。母たる者は善く心して小兒の生命と其發達とを熟思し漸次歩一步之を踪跡すべし、さらばたごひ一時に宇宙生命の聯結てふ深く且高尚なる覺念を小兒の心に喚醒し能はざるも、特に無限なる唯一の生命の源泉即ち至善なる獨一上帝の覺念に至ては之を喚起する更に容易ならずとすも小兒は既に深く且つ確かに其心の深底に是等の覺念を喚起す可き稟性を備るを感知すべし。而して此等の稟性を喚醒するには極めて徐々に之を爲すべし唯弱き歩みと優さしき手こを以て歩々着々之を導かざる可らず。而して之を爲すの道他に非ず能く天然の眞相を看破し人間の生涯を熟思し其智慧及想像の生命中に發顯せしこと全一なる生命を兒童の心中に増蓄するに在るなり、

母たるものは先づ此遊戯に於て此等着歩の初階に入るを得。母は今や其兒童が天

然の内界的聯結を其心裡に感ぜし事を覺知するに由て此着歩に入らんとしつゝ、あるなり。小兒は何物に於て最も具體的に最も圓滿に此聯結を活如として認むるを得るか、之を明示するもの豈に幼き鳥の巢に勝る物あらんや。試みに見よ春夏萬物發生の候に至れば凡て其發育上缺く可らざる需要物を齎らして其雛の生育を助け秋冬肅殺の氣來り侵すごきには既に羽毛以て寒氣を防ぎ兩翼以て自由に飛び自ら其餌を求むるを得可らしむ。其巢を構ふる位地を擇ぶに於ても親鳥は能く其食物夥多ある所に就きて其巢を造り以て其雛をして飢うるごこなからしむ。人家の周圍は蚊蠅蜘蛛其他昆虫稍多し是を以て檐下には燕雀巢くる生垣には百舌鳥白眼鳥巢ふ、蟲多き朽木の空洞には白頭翁巢くる蛙の群集する沼澤の邊には扶老鳥の巢あり

巢の形狀に至ても亦其營造の時ご場所ごに隨つて其構造を異にせり。林檎の枝にかゝる鶯の巢は其色灰色にして林檎の樹皮ご殆んど識別し難く白頭翁の巢は菌苔の把束の如くにして容易に菌苔ご區別し難し、共に外敵の襲來を避くるの便あ

り。特に造化の安排を見る可きは小兒若し羽毛未だ生ぜず全體極めて薄弱なる雛兒を見るごきは忽ち深く愛憐の全情を起し之を愛護せんご欲するの情念を發起するの事に在り、

小兒は其母に向て母よ彼の兒等の見出せる巢に雛兒の澤山居るを見よ、親鳥は巢を離れて遠く外に去りたれば雛兒は定めて無聊を感ぜしならん。兒等の來て雛兒を訪ひしは誠に善し、余は此雛兒を憐れむなりご母は教へてソハ汝過れり、親鳥は唯其雛兒の餌食なる穀粒若しくは小虫を求めんため暫らく去りしのみ、幾くもなく直ちに歸り來るべし。目を舉げて見よ、父鳥は巢邊の樹梢に在りて謹慎なる番兵の如く其雛兒の小兒に傷けられんことを恐れて脇目もふらず凝視し居るを、而して母鳥は今餌食を得て快活に飛び歸るなり。母鳥が飛去て餌食を尋ね父鳥が張番するごきも太陽は常に其巢を温めて母鳥の如く其雛兒を愛育するなり。見よ此雛兒の如何に幸福なるかを今其雛を遺して飛去れる母鳥は暫しも其子の事を忘れず、飛び去るごきも歌ふて曰く

「愛らしき 我子やしなふ 其ために 飛びくる蚊をぞ待ち兼ねる いでや獲物が手に入らば、家路をさして よろこびの あゆみをいそぎ はこばせん 歸る我身を見しごきの 子の喜や 如何ならん、 去れば我兒よ余も亦歌はなん

「をさなごよ しづかに遊べ ひごりして、 余の時々 汝がそばを はなれて 仕事に 出づるのも 皆汝がための 故ぞかし、 獨り遊ぶご 嘆くなよ、 天津日影は いつごても 照らして我子に 添ふものを、 神は子供もなく顔を きらひ給ふを よく知れよ、 如何にちひさき手足をも おもひのまゝに 動かして 遊ぶ力をもてるこそ 深き御神の惠なれ 其手ご足を よく用ひ たのしく遊ば、 末終に つよき身體ご なりぬべし」 慈愛の母よ オー母よ 汝が恩愛は わだつみの 千尋の底より 猶深く 青空よりも 猶廣し さればこの恩 世の中に くらぶるものは なかりけり

## ●花籠

(第三十六、七ページ)

手の位置は圖に示したるが如く右手の小指を左手の食指の上に置き右手の指頭を左手の拇指と食指との間に挿入し兩掌を以て空虚なる半圓形を作るべし、然るときは双手の拇指は外側にて相合ひ此に花籠の形狀成るべし。左右の手の位置を前と反對にするも可なり、然れども兩拇指は常に外側に在りて其形狀亦前と全じくすべし、而して此遊戲の目的は主として指の屈曲を習練するに在るなり、此遊戲の裡面に含蓄する意味は亦前章の如く見る可き物を以て見る可らざる心靈的の關係、特に小兒と家族との關係を教へ小兒の心を導きて相愛の情を喚起するに在り、

兒等は何故に斯く注意と懸念とを以て其奇麗なる籠に彼の愛らしき花を集むるや、其母は亦何故に手に鋏を持ちて彼の美麗なる百合花を剪り採るや、思ふに今日には是れ彼等の親愛なる父の誕生日なり、見よ其父は丘上紅紫爛熳たる園亭に坐して手に鉛筆を執り小兒の爲めに小畫を描きつゝあるを、蓋し彼は其誕生日を以て

亦その愛兒等の快樂の日と爲さん欲するなり、想ふに今彼の描く所は靜肅なる朝景色にて特に朝暎の將に海を出て、昇らんとするの美景に寄せて愛兒等今日有望の様を壽ぶきものならん。又見よ幼妹は既に之を預知せしもの、如く大なる花籠の満つるを待ち兼ね、其小さき花籠を携へて園亭に居る父の許に急げり。斯くて父に曰けらく「愛する父上よ、あなたの誕生日を祝せん爲め少量の花を持ち來れり、希くは之を受け玉はれ、暫らくせば母上、阿姉阿兄は更に澤山の美花を齎らし來らるべし」と父は喜んで「愛子よ、汝の花は實に美麗に、新鮮に、又清潔なり、今日は萬物一として我が心を喜ばしめざるなし」と曰へり。蓋し彼は日は燦然として輝き、空は晴れ渡りて秀明に、氣候は温和に、樹木は翠を滴らし、小鳥は樂しげに飛舞し、其聲は特に甘快に、而して園亭は花と露とにて更に一層の光彩を加へしを悦ぶなり。更に見よ彼の前面に聳えて燦として日光に反映する古城は宛かも彼の爲めに萬歳を唱ふるの風情あるに非ずや、是れ今日萬物悉く彼れに快適なる所以なり。父は更に彼女に曰へらく「然れども若し我に愛する少女なく、少女に親しき兄弟、姉妹な

くば此等の物ありと雖も左まで予に愉快ならざるべし」と、  
 少女(此書を視る少女)は忽ち叫んで曰く「アーそして親切に善良なる母も」父も亦此言辭  
 を發せしや疑なし、父はたしかに母が彼と都ての兒女を愛するを知りしなり。父又  
 た少女に向て曰く「少女よ、總て此等の歡喜に就き余は誰に向て感謝するか、汝は之  
 を知るや」と少女は窃に其心に以爲らく是れ父自らを云ふものならん、何となれば  
 父は實に斯く善良なればなりと。然るに父は曰く「我も我儕凡ての者に生命を賦與  
 し玉ひたる萬物の父、萬性の根原たる神、是れ即ち我儕今日の歡喜に就き感謝せざ  
 る可らざる方なり、今にも汝の母姉妹兄弟が來らば共に跪て此恩恵に感謝せん」と  
 感謝せんとして、囀る鳥、翼をならして、天さぶ雲雀、賞美を得んとして、舞ひ  
 行く燕、神の榮えを示さん、笑みつゝひらく、園の花、朝日の影に、廣が  
 りて、露にかゝやく、野邊の草、あゝいま祝詞と、讚美をもて、天なる父に  
 感謝せり、萬物の父に感謝せり、  
 父小女に向て曰く「今我儕も此花鳥の如く天の父に感謝せん」

母と共に此畫を見居る小女忽ち呼んで曰く「母上よ、父上の誕生日は何日なるや」  
 父は花をぞ愛で給ふ、されば花を奉らん、父は花を見て喜び、花は父愛を我  
 に示す

●鳩の家 (第三十八、九ページ)

手腕及び指の運動

此圖中の武骨なる男子の手は明白に鳩の家を構造する方法を示せり、左腕は稍  
 垂直ならしめて、杖即ち柱を爲し、組合はしたる兩手は圓形よりも寧ろ矩形にて、柱  
 上の鳩の家を表はし、右手の食指は自由に動きて開閉せらるゝ、鳩の家の戸に摸し  
 且つ種々に動くに由りて又、鳩にも擬せらるゝなり、兩腕の發達を均一ならしめん  
 爲め、左右相替へて右腕を以て其柱を爲し、左手の指を以て戸及び鳩に擬するも亦  
 可ならん、年長の小兒は此遊戯を見て自ら其眞似を爲すことを大なる快事と爲す

なり、何となれば小兒は既に幼稚のときより活潑なる生命特に天然の生命を観察  
するところを好み又自由に戸外に運動し其生命を強壯にし之を發達せしめん爲め  
清新なる空氣を呼吸することを願へばなり、故に小兒の撫育者たる母は能く注意  
して出來うる丈け多く清新なる空氣を小兒に與へざる可らず、然れども常に此に  
のみ止る可らず、たゞ小兒今は尙ほ無意識の境にあり、雖も其精神は常に一  
時現はれて乍ち過ぎ去るもの、中に永久に連續する存在を求め外界に就て内界  
の深意を求め、個々別々の中に深く潜伏する普遍を求め、尙ほ異様の中に統一を求  
め、竟に知らず識らず獨一の神の一閃光なる人の兒として自己の中に統一及和合  
即ち神を求むるなり、是故にたゞひ其未だ感知し得可き感情として現はれ居らざ  
るも能く力を盡して此天性を發育し、之をして次第に活潑に且濶大に竟に小兒の  
心中に活動する一個の覺念とならしめざる可らず、母又は母に代はりて養育の任  
に當るものは決して此兒は尙ほ餘り幼稚なりと謂ふ可らず、尙ほ餘り幼稚なりと  
は何ぞや、然らば卿は卿の兒童の心靈的開發は何處に何時、如何にして始まるかを

確知するか、未だ嘗て存在せざる心靈的開發の由て端を開く限界が何處に、何時如  
何にしてあり得るかを卿確知するや、心靈的開發の起發點として未だ嘗て劃然た  
る限界の存せざるに其限界を知れりと謂は、實に奇に非らずや、其發達は永久間  
斷なく其間は決して劃然たる限度をなすものに非るなり、母よ常に此眞理を心に  
留めて忘れざれ、語に曰はずや、常に心に思ふ事は又其行に顯はる、と、  
悲哉教育に關する疑問は往々何時より始むべきかといふ點に存せずして如何な  
る方法により如何にして實行すべきかといふ點にのみ存するとあり、小兒は其歩  
行に先ち其一步を運ぶの方を學ばざる可らず、其一步を運ぶに先ち其立たんこと  
を試みざる可らず、其立たんことを試むるに先ち其全體を開發し其脚を強壯にせ  
ざる可らず、若し唯其脚ありと云ふのみを以て直ちに強て小兒をして直立歩行せ  
しめんさせば、反て其脚をして軟弱屈曲せしむるの恐あるべし、身體發育の順序は  
亦心靈發育の法則なり、若し時期に後れて其兒を教育せば身心共に拙粗醜陋に陷  
るを免れざる可く、又若し早きに失するも亦然り、嗚呼哀哉吾人は嘗て軟弱にして

且つ屈曲せる脚を持てる兒童の如く教育早きに失せし爲め軟弱にして且つ屈曲せる心意を以て其生涯を送りし多數の人に會せざりしか。母及び母に代て養育の任に當るものは須らく生命の大聯結と其單純なる法則に準據して其少女を教育す可し、之れを忘れざらん爲め常に左の語を記するを要す曰く

「生命の局部は相連結して唯一の全體を成さざる可らず小兒の生の目的は幸福なる統一に達するに在り」

吾人は鳩の家と其表はせる單純なる生命の法則を忘る可らず、此法則は亦腕に嬰兒を抱持せる母の心と圖に示されたる凡ての者の心とに現はれ出で、躍如たり。母の腕に安らかに憑り居る健かなる嬰兒は其母の足下に在て物を啄みつゝある三羽の鳩を凝視して眼瞬もせず恰かも目を以て彼等を捕獲せんと欲するものに似たり、又一人の童男は恰かも遊戯に繫縛されしもの、如く身動きもせず母の前に立てり、彼は今切斷されし枝の彼方に栖り其巢及雛の所在を知られんことを恐れ故意に其雛の在る洞孔より其頭を反け居る山雀に心を奪れ

て惚をぬかし緊かご其手に握れる林檎さへ忘れ居れり、彼兒は鳥を驚かせじと低声に「暫らく御待ち、母上よ、彼の枝の切口に在る洞孔を御覽」云へり母は直ちに其意を察し行歩を止めてかの頻りに四圍に氣遣ひ居る小鳥を見たり。時に他の二人の小兒は我家を指して戻りつゝありしが何か彼等に取て大切なる事を語らひ合ひ交情頗る濃かなるが如くに見えたり、

小兒の右の方に在りし母は問へり「愛子よ汝は何處に在りしぞ」と、小兒は「庭や園や野や牧場や池や小川に」と答ふ

「我愛子は如何に美しき物を見しや」

「鳩と雛、鵝鳥と鶯、燕と雀、雲雀と鶯、鶴と山雀、鴉と鶻、甲虫と土蜂、

蚜虫と蝴蝶」

「鳩と雛とは何處にて見しや」

「庭にて見たり、母上よ彼等は皆庭に落ちたる穀粒を拾ふて之を食せり、雛は食ふ可きものを見出すときは疾走りて之に赴き、雌鷄は雛兒に與ふ可きものを得れば連

りに雛を呼ぶ鴉と鳩とは雛の如く疾く走る能はず、鴉の走るは鳩の如く、里鳩の走  
 るは鴉に似たり、併し鴉と鳩と、鶴と山雀とは皆善く跳れり、其硬き脛を以て跳る  
 を見るは頗る興味あり、母上よ私と共に往て之を見玉はぬか、鶴と驚とは能く水上  
 を泳ぎ又能く水中を潜る、然れども亦能く飛舞を善くす、嘗て私の頭上を超えて池  
 中に飛込み大に私を驚かせしことあり、と兒の語るを聞き母は「知れ愛子よ其鶴と  
 驚は亦鳩、雛、燕、雀、雲雀、鷹の如く鳥類なり、彼等は皆鳥類なり、小兒、母上よ鳩も牝雞  
 も亦鳥なるか、母、他の鳥の如く亦羽毛と兩翼と二本の脛を有するに非ずや、小兒、併  
 し鳩は鳩の家に栖み、牝雞は飛ぶこと能はず、母、少しは飛び得るなり、畢竟牝雞の飛  
 ぶ能はざるは其習練不足にして直ちに忘るゝに由るなり、我儕の忘る可らざるは  
 習練を爲すことなり、雀と燕は鳥なれども亦家若しくは檐下に巢を作るなり、小兒  
 「されば母よ蜂蝶及び蝸も亦鳥なるか、彼等は兩翼を有ち、鶯や牝雞よりも高く飛ぶ  
 に非らずや、母、汝は見ざるか、彼等は羽毛を有せず、鳥巢を作る能はず、其他鳥の當然  
 有すべき種々の物を有せざるを、彼等は其思ふが儘に動く故に鳥や其他受造物と

均しく動物なり、然れども鳥に非らず、彼等は又鳥の有せざる種々の物を有せり、此  
 蝸又は蠅を見よ、其體軀に所々刻目あるなり、故に此類の動物を關節動物と云ふな  
 り、小兒、母上よ今より一緒に野外に行き玉はざるや、總ての物皆美麗なり、母、予は汝  
 の衣服を縫ひ、汝の食物を調へ、其他萬事秩序よく整理せざる可らず、故に共に行く  
 こと能はざるなり、見よ彼の自由なる天然界を、萬物皆所を得て秩序整然各皆うる  
 はしく楽しく其働きを成し遂げて居るに非ずや、之を眺むるときには宛かも萬物  
 を斯くもうるはしく造り玉ひし神が「妻たるものよ、母たるものよ、汝の家に於ても  
 萬事秩序正しく各物其所を得、各人皆其職分を盡さねばならぬぞ」と云ひ玉ふを聞  
 くの心地ぞせらるゝなり、又眼を轉じて他の事物を見るときは、亦人各其所に安じ  
 て正業を勵まざる可らず、今や小兒は其強壯を養はん爲めに小鳥の如く遊びまは  
 るを得れども、其成長の後には林檎の樹の如く一定の場所に在りて善果を結ばざる  
 可らず」と云ひ玉ふ様に思はるゝなり、かゝる譯故母は汝と共に遊に行く能はざる  
 なり、たごひ母は樹木の如く家に留らざる可らざるも、汝は往て萬物を観察し、歸り



来て其話を母に告げよ「小兒」母よ私は明日再び行き、其時見し事を復た話すべし、希くば其節神がそれに就て語り玉ふ事を余に語り聞かせよ」

結論 教授と學習は人間の生涯を通じて止まざるものなり、白髪の教師も尚ほ學ぶ可き事多く老練なる教育家も尚ほ教へを受けざる可らず、音に人より學ばざる可らざるのみならず我儕を圍繞せる凡ての物より學ばざる可らず、動物よりも學ばざる可らず、我儕の鳩に於ける亦然り、余幼時嘗て鳩を飼へる人の家を訪へるこごあり其時我居れる室は恰も鳩の巢に隣り、時に多くの鳩が各自の家を指して歸る途次鳥語にて語り合ふを、しばし聞けり因て此に鳩の短歌を得たり、

「鳩室に 歸りし鳩 諸共に 空の旅路の 不思議をば 打語ひつ樂めり 汝

も其聲を聞きつらん クークークー」

小さき鳩が其巢を出て愉快に空に飛び行く様を告げらるゝは小兒の大に樂く思ふ所なり、

母たるもの、若し兒童に實話を語り聞かするに其適當なる時を以てせば其話は實

に小兒が其心中に深く潜伏する自己の内性を寫し見る究竟の鏡となるべきなり

● 此小さき拇指

(第四十、四十一ページ)

指を數ふること、此遊戲に於ける手の位置は多言を要せずして明かなり、且つ其手の位置は詳細に圖中に示されたれば茲には唯其意味に就き數言するを以て足れりとすべし、

小兒の天性に基き家庭又は幼稚園にてしばし見る所の是は拇指てふ言葉を以て始むる所の計數遊戲は或は漠として意味なきが如くなるも又他の一方より之を觀來るときは小兒をして悉く知らしむるは好まじからずと思はるゝばかり多くの事柄を含むものゝ如く見ゆ蓋し凡て計數の意味を含む遊戲は種々の點に於て小兒に必要なものにて是等の遊戲を交互反覆することに由て題詞の説明する如く更に一層明白なる理會を得べきなり。此短き遊戲の歌はよく其指を示して

食指、中指、環指、小指なる名の由来を説明せり、獨り拇指の説明なきは其母を代表するものなること人の皆よく知る所なればなり。抑此遊戯の効能は第一小兒に比較力を働かしめ、第二に名は必ず實に伴ふことを知らしめ、第三其極めて幼少なる時より夙に己れに密接の關係を有するものに注意せしめ、以て空漠たることを避けて注意深き思考力を發達せしむる等是なり、

女子を畫て左手を代表し男子を以て右手を代表せしめし所に畫工の考案自ら表はれたり。蓋し左手は即ち心臓に最も近くして女子の心情を表はし右手は即ち強健にして男子の意志を示せばなり。加之若し正當に之を觀察し善く之を了解するときは畫工は更に家族又は他の社交に於ては幾分か外面の差異あるに拘らず其内部に於ては高尚なる一致と平和なる共働との必ず存するを示さんとの深き意匠を凝らせしものなるを知り得べし。而して歌は既に此意を歌ひ畫も亦此意を表はせり、

母は其娘を左腕に抱きて今何事をか爲しつゝあり、彼れは彼女が成長の後善く事

を爲し得る様に指の名と其用法とを教へつゝあるなり。其下方に在る二少女は注意勤勉以て縫針と「ピンドメ」を試み、彼方の二小女は花園に在て花草の培養を勉むるなり。一童男は今や其友に贈らんとして勇しく李樹に攀ちて其實をちぎりつゝあるなり、

「母上よ、私をも樹に攀ち上らしめよ」今少し體力の強壯になりしとき」

● 拇指曲れ (第四十二三ページ)

此遊戯の方法は明かに二つの手の畫と歌とにて示され其意味は既に題詞に由て明かなれば亦殆んど言ふべき餘地を見ず、

小兒をして四肢を不適當に用ゐしむるときは其嗜慾の念を激發し、優雅の感情を害し心情の純潔を汚し、更に一層の憂慮を増すものなり。嗚呼此事たる單に小兒の働作と其心身の情形とを皮相的に考察するも既に其空言に非ずして確乎たる事

實なることを見得て餘あり。然らば今日廣く世間に流布し多く小兒の高尙なる性質を毒する此害物を預め防ぐの術あるや。若し得可くんば之を全く驅除し得るの法ありや。曰く唯一策あり即ち小兒の身體と心靈と感情と思想とを適當に運用し斷えず之を活動せしむる事是れなり。就中其四肢を習練して之を發達せしめ、勉めて之を運用することは能く嗜慾の激發を制し、又思慮なき忘念を去るを得べく。斯くて後更に高尙なる内界の考察に入るの路開く可きなり。即ち今茲に其端を開く所の此等の四肢五管の遊戲は實に小兒を導て此適當なる活動と習練とに進ましむる所以のものなり。

● 樂しき家族

(第四十四、五ページ)

善良なる母、親しき祖母

世若し精確なる理會と、最も思慮深き考察と注意厚き教養とを要するものありと

せば人間家庭の生活と、自然界に於て之に類似するものこそ即ち是れならめ、ア、家庭の生活なるかな、家庭の生活は三個の著しき觀察點よりして其甚だ重要なを見るなり。斯る重要なもの、性質と需要とを今此狭き紙面に縮寫せん。欲するは實に難きことならずや。家族は人類の祝福なり、神が人を教養し玉ふ方法中最も神聖なるものなり。家族よ家族よ我儕をして明白に率直に公言せしめば、爾は學校若しくは教會に勝りて重要ななり、故に正善恰當なるものを保護するに缺く可らざる。凡ての者よりも更に重要なこと勿論なり。試みに思へ若し家族にして講慎節制、思慮、考察の精神を涵養し之を學校に齎らさざりしならば如何知るべし。其教育法如何に完備するも畢竟中空なる卵殻の如く空の空に過ぎざるを其外形如何に善美なるも豈此中より新しき自由なる生命の孵化する理あらんや。若し家族にして其心情と精神と、觀念と思想と、行爲と生命とあらゆる全靈全身を擧げて之を活ける獨一眞神の祭壇に致し之を神聖にするに非らずんば教會ありと雖も將た何にかあらん、又正義と眞理の保障なる國法は如何、家族が神聖として之を崇む

るに非れば亦汚瀆を免れざるなり。是故に母たるものは其兒の尙ほ幼稚なるに及んで早く既に其簡單なる手指の遊戯に由りて全體一致なる性質就中家族の一體一致なる事を豫想し得る様に教へざる可らず。斯くの如くして母は始めて一致ある生命としての小兒の生涯に最も確實なる基礎を與へたるものと謂ふ可きなり。完全一致の存する所、此に必ず生命あり、少くとも生命の萌芽あるなり。支離滅裂の存する所にはたさひ其分裂にして微なりとするも必ず此に死あるなり、縦し否らずとするも亦必ず死の萌芽あるなり、

祖父母及父母と子孫の關係は實に詳明なるものにして特に家族に於て之を考察するの價值あるなり。小兒は宛も鏡に對して見るが如く、父母の祖父母に於ける關係中に自己が其父母に對するの關係を見るなり、何となれば小兒の其兩親に於ける關係と等しき關係を兩親も亦其祖父母に負ふことを見ればなり、而して父母は亦祖父母と自己との關係の如くに自己と其兒との關係を見るなり。此に五なる數にて表はされたる此複雑なる二重の關係は實に小兒の生命と其發達とに重要な

り。此圖を畫きし畫師は既に此重要を知て常に之を其眼中に存し、しばく五なる部分の中に全體一致の生命あることを寫さんせり。此圖中の花に於ても亦畫師の此意匠あらはれたり、蓋し凡ての有核果樹及び同族の植物の大概五の花瓣を有する事實より推考すれば此種の果物の特異なる滋味は數五なる法則中に存するに非ざるか。この思想は實に一顧の價值なきに非ず、安んぞ知らん此思想畫師の心に動き以て此圖を作りしに非ざるを、

● 小 さ き 拇 指 一 つ (第四十六七ページ)

圖に示すが如く指爪を少しくあげて拇指を自然のまゝに食指の傍に置き、逐次他の各指の名を呼んで之を數へ既に數へし指は之を曲げて掌中に伏さしめ、其各指の屈節は敢て拇指の指尖より超えて先きに進ましめざるの度に居らしむべし。斯くて其拳は美麗なる全體一致を表はし、兒童は歌を聞て其指を小兒と思ひ、指尖を

其顔面と想ふなり。畫師は實に此意匠を以て此手を描けり、否な寧ろ此手にて代表せられたる眠れる小兒を描きしなり、

休息と睡眠は此畫全幅の趣向にして其罌粟の花も梢上の五鳥と共に眠れり、然れども其生命は尙ほ熟睡の裡に潜みあるなり、而して此の如く重要な意味は亦數と數を計算ふることの中に深く潜みて存するなり、試みに思へ詩にして文字の數と韻脚の節度を顧みずして詩たるを得可きや、調節と計數とは是れ作詩に缺く可らざる要素に非らずや、又見よ全く數に關せず、時の正しき計算もなくして能く巧妙なる音楽や莊嚴なる神樂を奏し得可きや、一日一時の誤用は如何に人の全生涯を害するか、如何に些細なりとも一旦失ひし時は決して再び之を回復すること能はざるなり、必らずや爲めに多少の犠牲を爲してたゞに其幾分を回復するを得るのみ、兒童亦既に之を自覺するものに似たり、何となれば兒童の漸く生長するに従ひ其遊戲中に物數を計算することを好むは何人も能く知る所なればなり、是故に我儕は兒童の幼時に於て既に計算を好むの傾向あるを利導し、時の重要な

ことを十分に知らしめざる可らざるなり、

●指「ピアノ」 (第四十八、九ページ)

保姆又は母卿自身若くは其愛子の左手の指を「ピアノ」の原譜の如く其指節の殆んど直角を爲すばかりに地平に屈指、而して指に少許の力を入る可し、斯くて右手の指を以て「ピアノ」を奏すること、原譜を壓すが如く例の左手の指頭を壓す可し。

既に前章の遊戲に於てあらはしたるもの即ち唱歌に於ける計數の必要を兒童の心に感銘せしむる事は此遊戲に於ても亦重要なり、蓋し音楽に必要な事は其樂器の震動が一定の時間に一定の定數あるべき事にして、時と運動の計數、之れ實に唱歌に於て等閑に附す可らざるものなり、運動の法則並に其整齊の智識の如何に人生に重要なかは既に人の熟知する所なり、凡ての點に於て能く運動の整齊を了解する人は世之を稱して精緻なる調音者と云ふ、兒童の幼時に於て時に就ての

正確にして且つ精微なる觀念を開發し、將來秀逸なる調音者たるを得せしむるの教養を缺くときは、卿の心果して安きを得るか。幼少の時より夙に唱歌の力を開發せよ、さらば之れに由りて兒童の心裡に高貴なる貨寶を發掘して之を供給するを得可きなり。獨逸國の教育家は獨逸人が特に以太利人に比して其聽官の習練を等閑に附するを非難し、更に痛く其歌唱の機關を開發せざる事を詰責せり。然れども更に重要な事はよく内部の調音と唱歌とを習練し心に均齊和諧の觀念を造く。外耳未だ何をも聞かざる時に心耳は既に合調の和音を聽き、肉眼唯混雜をのみ見る所に心眼は既に此に其均齊を見るに至らしむるに在り。小兒未だ幼稚なるに當り早くも其心に内外調和の萌芽を植ゆるは何物か之れより重要なあらんや。蓋し人生は限りあり、此の短き生涯に於て其多端なる方面に向つて悉く我能を開發せしめんご欲するは到底能くする所に非るなり。然ども我に他人の開發せしむるのを曉得するの能力ありてよく他人の長所を咀嚼し、又之れを嘆美するを得ば幾分か我多端の方面に發達せしの意味あるなり。人誰か其一代に於て凡ての異なり

たる天稟を顯はし得るものあらんや、唯各人各自の天稟を開發し、我は彼れの天稟の中に我自己を品し、彼亦我天稟の中に彼自身を認め、互に相嘆美し相資益して始めてよく相調和したる一の全體として、凡ての各異の天稟を顯章するを得べきなり、神の影像をして圓滿ならしめんには互に相愛する全世界の人類を要するご知るべし

今此愛らしき小畫に付き一言を加へんか、思ふに慧敏なる母は此畫中に見ゆる凡ての美妙を其愛兒に聞かしむるを喜ぶならん、全幅の圖畫皆是れ音樂ならざるなきなり、見よ畫中何物か和諧の好音を發せざるものかある、穀物の穂ご其莖ごは調を合せて低聲に唱ひ、其中に巢籠りする雲雀は其好音に傾聽し、忽布の芳香は更に蜜蜂に甘快なれば、蜜蜂は之が爲めに其翅を鼓して感謝の樂を奏せり、青葉の梢に在る艶麗なる五彩の鳥は細微なる一音波をも聞洩らさじご瑟々たる泉流の上にも、栖み籠中の金翅雀は時々其翼を鼓して高調に歌ひ、恰かも最も小さき物の中にも造物主の大能を認めよご告ぐるに似たり、又二人の姉妹の靜かに奏する音曲の調

の面白さよ、彼等は共に唱ふ其歌聲のよく和調せるに殆んど其心を奪れたり、此一致和合の調べこそ我所謂音楽なれ、畫工は最も精緻に此畫を描けり。小兒の上方に在る二羽の鳥は容易く之を聞き得んが爲め成る可く近く棲りしに、小兒の頭上に在る老音楽師は自ら禁ずる能はずして美妙の法則を其翼の鼓動に由てあらはしつゝ、低調にて好音を弄せり、傍に在りし金甲虫は之を聞かん爲め今や咀みつゝありし青葉を棄て、音楽師に近づき來れり。於是色は日へらく「我儕も又我儕をあらはすなり」と實に音聲に傾聽するもの一として輝ける色を有たざるなきなり、穀物の穂と葉とは金色を帯び青空の樂師なる雲雀は土色なり、これ畦畔の色に紛れて容易に人に捕へられざらんが爲めなり、野の忽布は青くして蜜蜂は蔦色なり、愛らしき小兒の頬は薔薇色にして、微笑する童兒の髪は蔦色に、而して小女の髪は亞麻色なり。地上凡ての物は皆青空に圍繞せらるる是に於て樹葉は青空より其青色を吸收し之を黄色なる太陽の光線に調合し以て希望の色なる綠色を生ず。地は此の知くにして大に潤飾せらるゝなり、時に彩色絢爛たる金甲虫は來て「オー汝色よ、汝顔

料板に似たる背を有てる余をよも忘れはすまじ」と一聲嘯て其儘翼を鼓して何れへか飛去れり、

● 危害を離れて安全なる兄弟姉妹

(第五十、五十一ページ)

此小兒の遊戯に於る兩手の位置は極めて簡單にして圖解によりて既に十分明かなり、唯其指の把握は歌の意味と進行とに連れて徐々なるべきを注意す可きのみ、小兒の養育に於て最も精緻にして又最も重要に且つ困難なるは其最も高尚なる極内の生命、即ち感情智力及び先天の預覺を發育することに在るなり。此先天の預覺こそ是れ將來人生に於て最も高尚にして神聖なる凡てのもの、由て萌芽する所にして、後來宗教的生命即ち神と一致したる心性、思想及び行動の生命となるものは即ち此先天の預覺に外ならざるなり。然らば何時、何處に於て此生命の顯露始るか、蓋し是れ猶ほ植物の種子と其萌芽との如きなり、植物の種子と萌芽は其外見

に現れて吾人の知覺に入るに先ち既に久しく未だ現れずして存するなり、吾人の心裡に在る先天の預覺亦此の如きのみ。天文學は亦星を以て此理を示せり、見よ彼天空に燦然たる星は其星輝の未だ吾人の眼中に達せざるの以前既に久しく蒼天に輝きつゝありしものにあらずや、

此の如く我儕は何時何處に宗教性即ち神と一致の性が小兒の心に發達し始まるか得て之を知らざるなり。若し誤て時期未だ熟せざるに其教養を始むるときは恰かも穀種を播して日光雨露に曝らすの早きに過ぎ、酷に失するが如く適々其軟芽を害して止まんのみ。その晩きに過ぎ、弱きに失するの結果亦同一なりとす。然らば我儕は如何にす可きか、如何にして内に存する宗教的生命を外に發露せしめ得るか如何なる外相と内部に潛む宗教的生命とを相連結せしめ得るか、實に如何なる外相を以て其生命を開發せし外部の發現として之を見る可きか、我儕は小兒の兩手を合せ若しくは襁むことを以て其發現と爲す可きか、然らば此兩手を合し兩手を襁むことは果して内部の宗教的生命に何の關係かある、斯る偶然なる外事が如何

にして此内部なる特に人間の極内深奥の所にあるものと必然の關係を有し得るか。若し兩者の間必然の關係ありとせば何物か此兩者に貫通したるものありて存せざる可らず、其貫通したるものとは何ぞや、所謂一致なるもの即ち是なるに非らずや。さらば兩手を合せて之を襁むの事は決して偶然の事に非るなり、否な人性の一致に基ひて深く其心裡に存する一致の念を思はず外相に發表せし最も普通なる現象として之を見るべきなり。此事たる尚ほ深く之を證明する方法なきに非ず、然れども今之を詳論するの暇なし、此處にては唯兩手を合せて之を襁む事の宗教的一致を表はす事なるは決して偶然の次第に非らずと斷言するを以て満足すべし、

此の如く今我儕は至内的生命の結合を發表する外相に關し明確なる説明を得たり、唯小兒は未だ此事に關して教養せらるゝの度に達せざるのみ。此理由よりして我儕は此一致の外相を得て之を以て同じ天性を教養して更らに深く之を喚醒するの手段を得るなり。誰れか彼天使の如き小兒が其心裡に存する生命の一致を發



表せんご欲するごき必らず好んで其小きき兩手を合して之を摺むの事實を知らざるものあらんや。懇切に至内の生命の結合を教養することは決して有害に非なり、何ごなれば凡ての發達は必らず内部生命の結合を促進するものなればなり。此歌と題詞とは自ら此一致の意味と聯結せり、既に自己の心裡に心靈上の一一致を得て之を神聖に保持する高尚なる母は其子を教養するに當り兒童の心裡に亦此一致を得せしむるを以て其當然の義務と感ずるは是れ人情の自然なり。我儕は既に小きき指は小きき兒童並に幼なき小女と看做す可きを示し、且つ小兒は自己の利となりて害ごならざる限りは他人の生命の鏡中に自己の生命即ち其至内の心靈的生命を寫し見ることを好む者なる事をも述べたり、

●塔上の兒童

(第五十二三三ページ)

此遊戯は既に題詞に明かなるが如く菓子もみの遊戯を始めごしあらゆる手ご指

の遊戯を集合せしものなり、最初には兩手相離れ居り而して彼等が相合ふごきてふ詞を合圖に共に其手を打鳴らすなり。其他手の姿勢は此短歌と前々の諸章の歌ごに由りて容易く推想することを得可し。祖母の教會に行くごきの指の姿勢は左方の圖に示し、神を讚美し感謝する仕方は右方の圖に明かなり、屈曲し又は摺みたる手の姿勢は前圖に就て之を見るべし、巧みに排置せられし四つの圖は母が善く問ふごきを好む小兒の間に答ふるが如く圖自ら容易に説明を與ふるなり、即ち左の下方の圖は二人の祖母を先導ごして來る小兒の訪問を表はし、右の下方なる第二の圖中には小籠、小きき巢、鳥卵、鳩の舎水呑球などの事などを語らひ合ふ小兒ご其上方に對座して小兒の親しく遊ぶを見て樂む二人の祖母ごを描き出せり。第三圖には教會に行きつゝある二人の祖母ご塔の方に走り行く小兒あり、右の上方なる第四圖には崩壞れたる塔ご、危難より救ひ出され感謝しながら出て來る子供ごあり。此外圖中の事柄を能く考察し前々述べ來りたる種々の遊戯ご照合し之を實際小兒の養育に活用するは慧敏なる母

のよくなし得る所なり此上更に詳細なる説明を下すは母の能力をなみする所以なれば今別に贅言を加へざるべし、

● 幼児と月

(第五十四、五ページ)

此圖は殆んど説明を要せず母たる者孰か小兒の月を看るを喜び而して之を看る間は其心に存する子供ながらの心勞をも忘れて之を樂むの稟性あるを知らざらんや。彼等が成人となりて後も亦斯の如く世の辛苦艱難に遭遇せる時屢々高遠なる光明を仰ぎ、生命の源泉を望みて一時暫且の疾痛を忘るゝ事あり願ふに此短歌は思慮ある母をしてよく小兒自然の要求に適合しながら夙に此顯著にして重要なる稟性を教養せしむるの一助となるべし、

● 一歳半許の男兒と月

(第五十六、七ページ)

此歌は生れて一歳半ばかりなる小兒の爲す事柄を有體に記載せしものにして此題詞は即ち小兒殊に童兒の生に於て屢々見る所の此顯象に於ける一層高尙なる表號的觀念を説明するものなり我儕此題詞を讀むときは我儕が現に爲す所よりも一層多く小兒をして月と星とに關する思察力を發達して其快樂を享受せしめ其月に向ての熱心なる注視を我儕の同情缺くるがために之を空しからしむるが如きことなく善く之を導て月星に關する正確なる理會を得せしめざる可らずこの感念を深くせずんばあらず此の如くして例へば月の球形にして大空を運行することなどを明白に見得せしむるを得べし加之次に解説せる如く内部生命の一致を外界の顯象中に知覺せんご欲する小兒の時代に在ても理會し得らるゝ丈けの造物主の性質は夙に之を感知せしめざる可からざるなり、  
小兒は其未だ自ら理解する能はざる物に遭遇するときは之に關して大人の與ふる説明は眞偽を問はず容易に之を受け容るゝものなり最初幼兒に對し月は是れ

一個の人なりと云ふも、空中を流行する美麗なる輝ける球なりと云ふも、或は又星は黄金の小點に過ぎずと云ふも、無数の燃ゆる光と云ふも、抑又我を距る遠遠なるが故に斯く微なりと雖も其實は光輝赫々たる太陽なりと云ふも、小兒の之を信ずる更に異同あらざるべし。月星の活けるが如く見ゆる外相につきて以上の説明中前者は唯死せるものなりと雖も最後の説明は確證ある智見に導きつゝ活ける發達の根基となるものなり。何故に小兒をして最後の説明に近づかしめんとはせざるか。眞理は決して害をなさず之に反して誤謬は偶々眞理に導くが如きことあるも常に有害を免れざるなり、

● 二歳未満の少女と星

(第五十八、九ページ)

此圖と歌とは前章のものと同じ、殆んど相同じ、唯其異なる所は少女と二個の星とに在るのみ。通例薄暮より夜に亘りて輝く所の二個の星は蒼空にて相接近せる二個の

遊星なり。誰か小兒が萬物の中に人間的關係を見んと欲する動念を有すること、其必要を知らざるものあらんや。小兒の語ることの往々思慮あることは實に著しきものにして何人も彼女が如何にしてかゝる觀念の聯合と事物の比較とに達したるかを説明し得ざる程なり。然れども出来る限り永く且つ漸次に此動念を養ふことこの小兒の心靈と生命とを強壯にする所以なることは決して疑ふ可きに非ず。斯くて此題詞に於て特に顯著にせん。勉めたる一觀念即ち「唯一の靈、萬物の中に在り萬物の中に働らく」てう觀念を發達せしむるを得るなり、

● 壁に映ずる影鳥

(第六十六、一ページ)

人の身體は耳目鼻口四肢百體より成り、其思想感情は千種萬態變化極りなし。雖も其中には自ら相連結して分割す可らざる内部の一致ありて存するなり。故に小兒は部分の思索に先ちて必らず生命の一致を自覺せざるなし。而して個々別々

の能力を考察し之を養成せんとするに先ち生命の完全統一を確然知覺し活ける眞理として之を心に感ずることは小兒の生涯を通じて其内部及外部の發達到最も重要なことなり四肢五官の活動は各其官能を異にせり故に其發達の初に當てや互に相反動せざるなく手の遊戯と脚の運動も必ずや亦視官の働を喚起す我儕は小兒が月界に達せんを欲するに當り其視官の刺激が如何に身體と四肢との活動に反動するかを注視せざる可らず又視官の刺激と同時に小兒は聽官をも用ゆるを要するを知らざる可らず試みに思へ凡百の事言語と音調との伴ふあるときは如何に小兒の心に働く様を異にするかを母が小兒の爲めに萬事を爲すに當てや別に思慮を須ひず唯其母たるの本能性に鼓動せられて小兒が未だ瞥見して問ふことすら爲さるるに早く既に其爲す所の事には必ず言語を添え其言語には必ず一々其場合に相當せる特別なる抑揚を加へざるはなし然れども言語と音調の知覺及び聽官の喚醒開發並に其練習は亦常に視官の媒介に由るを見るなり實に小兒發達の初期に於ては其感官の動作何れも個々別々にして更に相互

の聯絡なきことは苟も其手に觸れ目に見ゆる所の物は彼此の差別なく皆直ちに其口に入る、を見て明瞭なり然れども久しからずして視官は檢定者とし整理者として聽官及び其他の諸感官の上に坐を占むるに至るかの最も深奥に坐する心靈すらも視官によりて自ら人の前に顯露し來るを常とす是故に母は小兒に向て「愛兒よ汝の清らかなる瞳子を通じて予は汝の心を見る」と曰ひ而して吾人も亦小兒の生涯に最も重要な所の健眼を見れば往々之を呼ぶに高尚なる心靈的の意味を含める名稱を以てし「賢そうな眼」と稱するなり故に我儕は主として視官の運用を要求して「ア、兒よ注意せよ汝の四下を見よ」と言はざる可らず若し眼ありて見るここ能はず「我子よ汝は見えず又聞えず」と言はざるを得ずんば其悲痛如何ばかりぞや此等の言辭に由りて我儕は小兒の心身の幸福に關して視官の甚だ重要なるのみならず亦小兒の心靈開發の中心點たるを認識せざるを得ざるなり蓋し小兒の心意と生命とを教養せんには視官實に其開發の源泉にして亦其發達の起點たらざるを得ざればなり、

此の如く吾人は相反する二途よりして此等の遊戯と唱歌との補助に由り小兒に與へんとする凡ての教育の中心及び起點は如何なるものなるかを明瞭に曉解することを得たり此教育の方法こそ小兒の天性の唯一なること及其生命の健康を傷ふことなく又其温き感情の冷却することなく、圓滿不偏なる存在者として其心靈の總ての活力を開發することを得る所以の方法なれ我儕は小兒をして「視る」てふ語の最も完全にして高尚なる意義即ち視るご感ずることの二義を悟らしめんご欲するなり何ごなれば萬物を一目の下に集め愛の眼を以て之を見る所の完全なる視察は先見を以て照臨する愛の神の最も高尚なる性質なればなり願ふに我儕を信任せらるゝ母は更に聰明なる眼ご、深博なる智見ご、圓滿なる精神ごを以て我儕の既に示したる道を尙ほ遠く探らんご欲せらるゝなるべし蓋し我儕が今より兒童教養の爲に取らんごする所の道は實に兒童自然生々の嗜好を開發し之を運用せんごするに在るなり、

諸今より此遊戯の事を考究せんごす、元來此遊戯は都市ご田舎ごを問はず如何な

る階級の社會にも善く行はるゝものにして我儕は幼時より此遊戯の我家族の中にも亦行はれ我儕は屢々之を以て我小妹を娛めたることありしを記し居れり、

諸滑澤なる鏡面に日光を受け之を陰暗らき壁上に向て動かすごきは閃光閃々壁上に動くを見る可し、杯水を以て鏡面に代ふるも亦同じ、小兒は之を呼んで影鳥ごは云ふなり此歌ご題詞ごは此遊戯に於ける高尚なる意味を説明するに足るべしご雖ごも、亦是れ前章及び後章の遊戯に於ける歌ご題詞ごの如く此遊戯より得る唯一の意味には非るなり此歌ご題詞ごは此遊戯に由りて小兒の感じ、且つ理會するに最も善きものにして又其心を喚醒する、最善のものたるには相違なしご雖ごも唯これのみを以て此遊戯の意を盡したるものご爲す可らず、此等は畢竟此遊戯に於て人々の知覺せしご感發せしごを永く堅持してよく之を照合し、以て之を小兒の啓發に用ゆるの雛形たり、道標たる爲めに與へられしものに過ぎざるなり、

「母上よ彼小兒の手に持てる物は何なるや」「小さき鏡なり」「鏡を以て何を爲すか」「日光を捕ふるなり」「それは亦何の爲めに」「向ふの壁に光の閃影を寫して彼の小

弟を娛めん爲めに、「ア、それにて了解するを得たり、丁度小さき鳥の如くに見ゆ」  
 「然り弟にも其様に見ゆるを以て彼は鳥ならんかと思ふて之れを捕へんごするな  
 り」「母上よあなたの鏡を貸して下され私も之を試み見ん」「此水を入れたるコツ  
 プにても爲し得べし、併し之を破損せざる様注意すべし」「母上よ見玉へ私も之を  
 爲し得るなり」「勿論爾にも出来ぬ筈はなし」「母上よあなたが若し之を爲し玉は  
 ば私は其鳥を捕ふべし」「捕へ得べくんば捕へて見るべし」「ア、母上よ此鳥は捕  
 ふること出来ず私が確かに手の下に捕へしと思ふときは、モ、手の上に輝て居る  
 なり」「左なり、此鳥は唯輝ける現象のみなれば、決して捕へ得べきものに非るなり  
 何物にても決して捕ふるご出来ざるなり」「母上よあなたも亦私を捕へること  
 能はざるなり試みに追及して見玉へ」「よろしソレ今捕へたり、爾は光の如く迅速  
 ならざる可らず」

見ようつくしき 少女子が 長き紙切 手に持ちて やうく 高く 之を引  
 けば 小猫はねらひを 定めつゝしきりに之を 捕らんごし されど短き

足を以て かゝる賞美を得んごは 無益よ無益よ

「母上よ此圖に在る小兒等は何を爲し居るか」「彼等は蝶を捕へんごして居るなり  
 二人の小女は網を以てし、此兒は手を以てし、彼の跪て居るものは手拭を以て之を  
 捕へんごせり、されども蝶は忽然として飛び去れり」「牆の傍に在る小女は何を爲  
 し居るか、彼は静かに立ち居れり」「汝は彼女が全身を伸ばして居るを見ざるや、彼  
 女は牆を越え往て小兒等を助けんご思ひ出来る丈け伸び上がれども牆を乗り越  
 ゆること能はざるなり」「母上よ男兒は牆を乗り越すごを得るなり、私も亦之を  
 爲し得べし、何故彼女のみは全く攀ち上るごを能くせざるや」「汝は彼の兄弟が牆  
 下の燕を捕へんごするを彼が見て居るを知らざるか、併し燕は飛去りて最早見え  
 ざるなり」「尙ほ外に二人の小兒あり併し彼等は静かに坐し居れり、慥かに彼等は  
 何物をも捕へんごはせざるなり」「併し愛兒よ彼等は何物かを確かご握り得たる  
 様に見ゆ、何を得たるか推量して見よ」「私には分らず」「今や太陽は彼方の湖水の  
 上に沈まんごして其色甚鮮かなり、彼の小兒等はいつまでもかの黄金色なる夕陽

の光線を堅持し得べし。彼等は之を得ること能はざるべきか。「母上よ夕陽は既に湖水の彼方の小丘の陰に没し去りたるに非らずや、其光線は唯現象のみ、如何にして之を堅持し得んや」「併し彼等はそれを緊かこ持ち得るなり」「否な母上よそれは到底能くす可らず」「併し彼等の眼に由りて彼等の心中に堅持し得るなり。汝は嘗て汝の父が汝と別るゝに臨み告別せしときの慈愛に満てる恩顔と其眼色を今に記憶せざるか。汝は近頃其事を私に告げしに非ずや、我父は速かに歸り玉はざるやと問しとき汝は再び彼を汝の心中に見ざりしや」「ア、然り、母上よ、私は常に我父を見るを得るなり」「されば汝は父上の在まざるゝときにも父上を見、之を堅持し得ることを悟らざるか」「ア、左様、私は其れを爲し得るなり、母上よ、私に心霊あるが故に」

● 牆壁上の兎

(第六十二三ページ)

此遊戯は視官の習練に必要なものとして廣く世に行はるゝものなり、今此に十分精密なる圖解あれば別に説明を要せざるべし。此遊戯は朝夕は日光、夜分は燈火を借りて行ふものにて、其巧者なる人の運動及び姿勢には種々の變化あるを以て稍長じて自ら此遊戯を爲し得る小兒は特に之を好むなり。余は確信すらく常に新なる娛樂を小兒に與ふる凡ての遊戯には人間の蓄なる小兒は勿論又凡ての大人の爲めにも有益なる眞理の標識ありて存せざるなし。又信すらく無邪氣にして快活なる小兒の中には人生の最も純潔なる喜樂即ち明快なる心意着實なる心情及び精醇なる靈魂の喜樂混々として湧出するものにして是れぞこれ彼等小兒を導て造物主と共働し且つ感通する眞成なる心靈的生活に達せしむる所のものなれど、

如何にせば兎を壁上に現はし得るか、  
皎々たる光明と其照す所の平滑なる白壁との中間に一個の暗き物體を差出すべ

し、さらば快活なる影畫は明了なる形狀を以て躍如として壁上に現出すべし。是れ唯此遊戲の外觀のみ思慮深き者は必らず其中に深意の存するを發見し得べし。思ふに下に述ぶることの如き蓋し其意味の一ならん彼の生命及土地の暗黒なる形相も一旦神の靈光に照して之を觀來る時は平靜清心なる人の目には一層高尚なる生命の影像と見ゆるなるべし。例へば彼の怪岩怒立する怕ろしき地も日光之を照せば幽靜佳美なる勝區となるべく世界第一の絶景も其美しき諸點の日光に照らさるゝなくば忽ち其風趣を失ひ荒涼殺風景の地となり了るべし。又昨日は高尚なる心靈に照されいと楽しく感ぜられし境遇も今日其光輝かざる時は其喜樂忽ち失せて空渴枯涸の有様に陥り唯厭忌悲痛すべきを見るに至るべし。之に反して其初めはいと冷かにして物寂しく見ゆるものも一朝高尚なる心の光に照らさるゝ時は大に我心を喜ばしむるものとなるべし。さらば外物をして此の如く悽慘に且つ嫌惡すべきが如く見えしむるものは畢竟我心意の所爲のみと明知確信するときは能く我心の喜樂を回復するを得るなり。之を要するに此思想と次章の遊戲

こは内外の生命即ち心靈の光と太陽の光との働らきに由りて兒童を導くの誘因と勢力とを與ふるなるべし。蓋し赫々たる日光の照す所には暗黒なる影像も明白限定なるものとして其形を現はすなり、此遊戲をなす時大きき異なりたる二手例へば母と娘とが同時に大小二頭の兎を異りたる地位に寫し出せば更に一層の興味を増すべし、此圖は二頭の兎が茂れる森林中に其姿を隠さんとする様に至るまで凡ての事を能く描き彰はせり、之に加るに慧敏なる母の注意深き説明を以てせば尙一層の明瞭を加ふべし故に我儕は又贅言を重ねざるべし、

● 狼と猪

(第六十四七ページ)

此遊戲も亦圖と歌と題詞とが既に自ら其説明を與ふる故茲に重ねて詳言するの要なし。壁上の寫影は指と指と相揃へ兩手を平たく合せ兩拇指をして耳の狀を爲



さしめ斯くて兩手を開閉するときは自ら動物の状を爲すなり、而して反覆之を試れば終に完全なる寫影を得べし、

母たるものは其子と共に動物を観る場合には特に心して題詞の指示する所を考へざる可らず何となれば動物は往々其劣等なる天性を急激明白に現はし嬌軟なる小兒の心には強きに過る程の刺激を與ふることあればなり。是れ動物のみに非らず人にも亦これあるなり。若し小兒をして神経質にして想像強き性質ならしめば特に其想像を潔淨ならしめ勉めて中庸を失はざらしむること最も重要なり。たごひ小兒に此等の癖性なしとするも輕卒なる言語に由りて誤想を起さしめざる様に注意すべし。されば無邪氣なる兒童は自ら其純潔を守り動物を見るも動物は更にこれより善くするを知らずてふ明白なる眞理に由りて容易く之を説明し天然の現象を無害に看過するを得べし。大人小兒に論なく人は決して下等動物と同一なる者に非ず故に自ら其爲す所を知らざる可からず、大人は固より然り小兒も亦之を知らずして可なりと謂ふ可らず。されば既に鳥の巢の章に於て説明せし

如く母は其兒をして動物が各忠實に其天性に順て發達し、よく天然全體の生命と相一致して働くことを注意考察せしめざる可らず、上は動物より下花艸に至る迄其生命の斯くも健全に、新鮮に、喜樂なる所以は正しく唯此理由に在るなり。凡ての動物が其發達の各程度に於て常にその恣に變ず可ざる天分を完成するが如く人も亦小兒の時より凡て發達の時代を貫て忠實に其天職即ち命運を完成せざる可らず。兒童をして夙に將來負擔す可き多方の義務を完成するに必要なる準備として其發達の各一程度に於て必らず之れに相應する職分の存するありて決して避く可らざるものなることを明白に瞭解せしむるは寔に重要なることなり、

人は其年齒に係らず各相應なる義務と心勞とあるものにして小兒と雖も亦之れを免れず。而して其有意と無意とを問はず能く其義務を成すものは實に幸福なるものなり。義務は決して重荷に非らず、能く義務を盡せば遂に之に導かれて光明の心地に達し高尚なる天福を享受するを得るなり。されば活潑なる健兒は明白簡易に且つ果然として其義務たることを説明せらるゝに於ては好んで之を成さん

ことを欲するものなり。義務を完成することは能く身體と心意を強壯にし、而して成功の自覺は兒童の喜ぶ所の獨立の感覺を生ずるものなり。見よ兒童が其小さき義務を成したるごき如何に幸福なる感情を有するかを是實に兒童をして幸福なる自重の念を生ぜしむる所以なり。忠實に兒童の多方向性を研究し善く之を撫育し以て其性を完ふせしむるものは實に幸福なる人と云ふべし、

● 二個の窓

(第六十八―七十一ページ)

此兩圖に於ける手の姿勢は一見して明白なり。凡て兒童は指と指とを組合せたる間隙或は切抜きたる紙の孔等凡て狭き間隙より光を窺ひ見ることを好む者なることは皆人の知る所なり。此事實は即ち是れ人心の有限にして高尚なる靈性的光明を無制限に吸収するの能力なく、赫々たる光輝を制限なく射込まるゝごきは徒らに其靈眼を眩惑するのみにして決して之を解釋し又は之を再現する能はずこ

の理を暗々裡に告白するものと謂ふべし、

此遊戯は日光又は燈火によりて之をなし得べし、

心靈の習練に關しては此遊戯は前二章の遊戯に比し積極と消極の相違あり。前二章に於ては勉めて野卑にして凡俗なる情性を喚起せざる様に注意し、此章に於ては寧ろ高尚なる感情を喚起して之を發育せんことを欲するなり。されば母たる卿は既に純潔清白の中に兒童の快樂を養ひし如く、今は亦灼燿たる光明の中に其快樂を養はざる可らず、

見よ、兒童の全心は其愛する所の光明の現象に吸収されたるを何物か光明の知覺及感化の如くによく兒童の心靈を有益に繋ぐことをせんや。卿の兒童は既に此先天的豫意を以てるに似たり、

「心の清きものごなれ、智慧の設計せしものを取りて之を實行するものは更に勝りたる智慧者にして於是か最も高尚なる進歩あるなり」之を爲さしめんが爲に母は其子の心身を強壯にするごきを勉めざる可らず。而して父たるものは兒童をして

其生涯の春時に於て早く純潔と高尚なる品性に達せしめん爲め大に其力を致さざる可らず、

「彼兒童は何故思案の體にて窓下に立つか」彼は如何にして此輝ける日光が清水の底まで照耀して斯くも美しき種々の光色を現はすかを考へ居るなり。「母上、父上疾く來り玉へ、姉上は日光のさし入る窓下に清水を盛れる「コツブ」を持來りしにアレあの通り美麗しき色の圈と光線とが恰も虹の如く又露の如く顯はるゝなりアー母上よ實に美麗なることには非ずや。見玉へ姉が「コツブ」を揺すさき彼の各種の色が恰も汝と私等とが兎遊びを爲すさきの如く互に入り亂れて閃爍たるを」彼の高尚寛仁にして勤勉なる人が兒童の精神と生涯とを純潔ならしめん爲め經營したる苦心の効空しからで、最も高尚なる幸福の花の咲き出でたるを見し時は其喜の大なる實に兒童が彼の光の美麗なる現象を見て嬉樂措かざるご一般なるものあり。

さらば母たるものは兒童の好む無邪氣なる快樂を汚さぬ様に之を補助せざる

可らず、

「併し彼の上圖にある兒童は何故に泣き居るか」彼は何氣なく窓硝子を打破りたり然るに暗らき板や不透明なる紙にて之を繕ふては清く輝く光明をして室内を照さしむること能はざるを以て彼は今止むを得ず遠く硝子舗にまで行かんごなし居るなり。されば我儕の兒も輕浮不注意に由りて此の如く將に心靈に入らんごする光を妨げざる様にせざる可らず。若し一旦心靈中に暗黒を生ずる時は之を驅逐する爲めには幾多の勞力を費し幾多の時間を犠牲にせざる可らず。然れども若し右の方なる小兒の如く適當なる時機に於て眞理の光明に向て其窓戸を開くごきは恰も日光が陰暗なる土窖に照し入るが如く直ちに生命の暗鬱なる深淵に透徹して其心の隅々迄も照す可きなり、

清き眼と 動悸うつ 其心に 天然は おのが榮光をあらはして 汝と  
離れず 住むぞかし

次の圖に畫かれたる母の膝掛の上なる二人の兒童を見よ其一人は母の腕に抱か

れたり二人共如何にも満足の態に見ゆるに非ずや。彼等は旭日の昇るを見つめ居りて少しく疲れしものゝ如し。其時小さき兒童は妹に向ひ「來れ來りて暫時花園に行かんことを母に求めよ」と

然り我子よ行けよ行け

花は盛になりにつけり

花の如くにうつくしく

光の如くかゝやきて

心を清くもてよかし

●炭焼人の小屋

(第七十二三ページ)

両手の姿勢は明白に圖に示されたり而して手腕は机の如きものゝ上に在り既に説明せし如く視官が他に勝りて人の内界と高尚なる靈界との交通の機關たるが如く手は亦特に心意と其周圍なる觸るゝを得可き物體世界との交通の方便たるなり而して異日靈性的思想が視官に於て其形を實にするを得る所以は全く此實

實際的器械の力に由らざるを得ず此準備を爲さんが爲めに手は兒童の遊戲の狭き範圍に用ゐらるゝなり、

人は唯左右相反せる二手と四本の指一對と兩拇指と有るのみ而して拇指と他の指とは互に相對向して反て相制するものに似たり然れども此二手十指によりて人の爲し遂ぐる事柄や其數實に窮なく又兒童は之を以て限なく多くの遊戲をなし得以て許多の快樂を享け自然に其性情の醒起を遂げ得るものなることを思ふときは實に其作用の無限なるに驚歎せざるを得ず此事實は兒童に向て自己の分限を超えて種々の材料を借り來らずとも其掌中に在る僅少の物を以て如何に多くの事を成就して綽々餘裕あるを得べきかを知らしむるなり。英人某曾て父なる神の親切慈愛及び至善を人に顯はす十分なる確證は唯一の人の手にて足れりて之を證せんが爲め一冊の書籍を著はせしは實に正當なる事と謂ふべし蓋し細小卑近なるものこそ却て如何にせば小なるものより多くのものを造り出すを得可きかを考へることを人に教ゆるものなればなり。願ふに是れぞ人に神性あるを表

明するものに非るか、是れぞ人が彼の最も卑近にして且つ最も微小なるものより斯く多くの物を創造し玉ひし神に類似せるを顯はすものに非るか。此の如く兒童の手を重んじ其手と其手の作用に就き熟考することは、夙に其心裡に其手を濫用して自己と其手を害することなく反て其行爲に於て其創造者なる父なる神に似んことを欲するの精神を喚醒する所以となるべく。又此の如く兒童をして其自己の手を貴重せしむる時はそれと同時に兒童をして天父即ち其手を以て「パン」を供へ凡て肉體の需要を充たし玉ふ神を尊敬せしむるを得るのみならず、又彼の卑賤なる勞作者の勞働を見て是實に一個人並に人類社會より害悪と危険を驅除するのみならず又往々直接に人類の福祉を増進するものなりとて之を尊重するに至らしむることを得可し。若し煤と炭粉とを以て其顔面と毛髪とを染めたる炭焼翁ありて意を用ゐて木炭を焼かざりせば吾人は學術技藝の習練に於て今果して如何なる位地に立つ可きか、化學に關する天然物の研究に於て吾人は今果して幾何の進歩を爲し居る可きか、

煤けたる胸 よこれし「シャツ」 其下にこそ正直と 無邪氣と徳義は 住まふなれ。

● 大工 (第七十四、五ページ)

此遊戯に於ける兩手の姿勢は之を説示すること頗る困難なれば唯圖に就て熟視されんことを望むのみ然れども今少しく之れが説明を試みんに兩手の姿勢は大概は炭焼の章に於けるものと異なるなし、唯此章にては前章に於ける如く手を臺の上に置かず自由に保持するの差あるのみ、斯くて小指無名指及び中指の頂きを軽く相接せしめ、唯食指のみ自由に動搖するを得可らしむ、然るときは左手の食指は一株の樹を表はし右手の食指は鋸を以て樹を切倒す大工を表はし、左手の食指は今右手の食指に斬られたる樹となりて横さまに倒れ、其指尖は右の食指の指節に接すれば右手の曲りたる食指は大工が今將に其樹を鋸り居るの狀を示すなる

べし、而して此圖の手と指の姿勢は亦宛然たる家屋の形状なり、屋翼あり、窓牖あり、門戸あり、唯門戸の小に失せるを憾むのみ。

兒童の身體の潔淨にして其四肢五官の習練周到に規律正しく其使用皆宜しきに合ひ而して其衣服亦恰好にして清潔なることは彼等をして家庭の務めを爲すに容易ならしめ家族の生活を快適ならしむるに與て助あり。之と同じく家屋の構造其宜しきを得て諸部相稱ひ、秩序整然たることは亦大なる影響を家族の生活の上に及ぼすものなり、家屋の全家族に於けるは猶ほ外皮の全身體に於けるが如し、家族の外圍を包みて其外部を擁護するの外皮は實に家屋に外ならず家族生活の幸福は其家内に住む人々の健康に關すと同時に亦適宜に整理せられたる家屋に關すること決して尠小ならず、顧ふに家屋と房室とは最も高尚なる家族的生命の養育所たり、避難所たり、この先天的預覺は兒童が家室を作るの遊戯を好む所以の理由を説明するに幾多の光明を與ふるなるべし。蓋し人生後年の正眞にして重要な生活は正しく彼の眞摯醇粹にして未だ室家以外の經驗より得來るべき暗鬱な

る感情衝動の何たるを解せざる兒童及青年の胸裡に横はる所の先天的預覺の綿々たる連續中に存するを見るなり。若し兒童の幼時に當り夙に凡ての先天的預覺を養成して之を強固にし且つ之を開發することを得、而して其一層高尚なる意味に於て之を以て青年のために保護の天使たらしむるを得ば其幼年より大人に至る迄凡ての生涯に如何に著大なる變化を來す可きか實に我儕の想像の外にあるべし。

圖の右方なる兒童は自ら材木となりて二人の小女に之を鋸らしむるの狀を爲し、左方の愛らしき二女は沈黙考して今建て終りし家の傍に坐せり、蓋し是亦彼等の胸裡に存する一種の預覺即ち骨肉相親み室家團樂の樂を享けんには多くの獻身と忍耐とを要すこの預覺により不知不識此の如き事を成せるものなるべし、然らば此小さき頭腦は何を考へ居るか此幼なき心は何を感じ居るか、美しき家に住むことのそのたのしきは如何なるぞ、さればわれらは潔くうれしき思想の湧出で、活きたる生涯の物語其物語は神

聖の意味に 語らるゝ事を見ん

左の下方なる母は既に左の意を兒童に曉解せしめんを試むるに似たり、

貴重すべきは 大工の技術 彼もし職務をよく成さば 我また彼を 尊敬

せん 大工がもしも 丈夫なる 家を作りて 與へずば 母はかはゆき、子

共に 何處に安く 住まふべき

● 橋 梁 (第七十六、七ページ)

二本の拇指を以て二個の橋桁に擬し、他の諸指を其上に支へ、一の中指の指頭を少しく曲げて他の中指の下に置き、次で各指互に相支るを得せしむべし。小川の兩岸の如く互に相隔離して見ゆる反對の兩極を連接することは快活、慈惠の働きにして實に感謝するの價値あるものなり。母たる卿は其兒をして夙に之を感ぜしめざる可らず、蓋し不整頓にして相反對することは家族の生活に最も深き苦痛を與

ふるものにして、之に反して意外の一致は言ふべからざる平和を來すものなることは何人よりも卿の最も強く感ずる所なるべし。何物か家族の生活に勝りて天地の懸隔ある最も大なる反對を能く一致せしむるものぞ何の處にか家族に於ける融和よりも更に勝りたる幸福なる融和を致し得る所かある故に兒童に教示して天賦の外観の中に之を通じて達し得可き内界の思想あることを室家即ち平和なる家族の生活中に於て認識せしめ、又彼等をして外部の知覺すべき物の授與者を認むる中に自ら又内界の知覺すべからざるものゝ授與者を識らしめざる可らず彼の大工の子を送りて人間の住居を作らしめ、以て室家を形成することを得せしめ、以て其裡に於て人生の最大至難なる反對の兩端を平等にせしめ、又夫をして心の喜樂と靈の平和との永く住まる所即ち所謂天國の住家たらしめ、玉ふたる神に感謝することを教へざるべからず。橋の圖よりして此等眞理の一斑を教へ如何にして獨立の働の中に反對の兩端の中保及一致を看出すべきかを悟らしむべし、若し未だ十分明細に之を悟らしむるに適せずばせめては彼の先天的預覺によ

り暗々裡に之を黙悟せしむべし。卿の生涯行爲によりて之を示すべく、又特に大工の子の中保者たる生涯、其實例により、此事理を深く兒童の心に刻せしむべし。よく斯の如くなるを得ば、母又は兒童の手を以て擬似せし橋梁、又は之に類したる總てのものは、兒童をして異日見る可きものと見る可らざるものとを聯結せしめ、且つ大工の子に就て萬有の父の愛子にして、人神の中保者たるものを認め、之を愛するに至らしむるの方便なる可きなり。

● 二個の門

(第七十八—八十一ページ)

手の姿勢は何れに於ても共に兩手を接近せしめて門の形に擬せしものなり。雖も牧場の門よりも花園の門の方寧ろよく眞に迫まれり。此等の遊戯の意味及び性質は容易に説明するを得べし。前者の牧場は兒童に其所持する物を保存すべきことを教へ、後者は兒童をして四圍の諸物體を認識し、先づ家に

在るもの、庭に在るもの、花園に在るもの、野に在るもの、次に平原に在るもの、森林に在るもの、名を唱へしむるに在り、且音に其名に由てのみならず、亦其品質に由て物體を知るところを教へ、音に能動的品質、即ち其動作のみならず、又其所動的品質、即ち其性質を知らしめざる可らず。母よ、卿は曾て兒童の心中に此活潑なる感覺の深く潜伏するところを考へ得しことありや、時至れば、兒童は實に奇異なる方法にて活動の性質に對する言語を自然に發見するもの、如く見ゆ。見よ、此時に至れば、兒童は如何に滑なるもの、毛の如きもの、髪、の如きもの、輝けるもの、圓もの、回轉するもの、匍匐するもの、跳舞するものに注目するところを好むかを、又見よ、實に不思議なる程、迅速容易に知覺言語及觀念を把握して、之を聯結するを、されば、心して、兒童の心中に存する此感覺を保持し、決して之が養成を忽にす可らず、若し此感覺を養成せず、又正しく之を習練して、運用せしめざるべきは、此能力次第に、銹腐して、遂には全く消え失するに至ること、宛かも、彼磁石の十分に使用せられざるべきは、遂に銹びて、其力を失ふが如くなるべし。又近く喩れば、此感覺は破れたる盃子に盛れる高價



なる葡萄酒の如くなるべし直ちに之を用ゐざるときは其力は永く亡失して回復の期なかる可きなり。

母よ卿は生垣の忍冬の如く相對して生長する花其他羊の群れるが如き白き花を能く知るなるべし、さらば

小兒が花より、朝夕に

其美色其柔和

或は鐘に、似たるあり

騎兵の如く、連なりたる

また花束の、有様に

もし健康なる、眼をかりて

文字をば之に、與へ得ん

養ひ勉めよ、其母よ

遂に生ひ立つ、時を得て

學ぶ課業は、幾何ぞ、

其天真其華麗

又は星かご、見ゆるあり

圈をなして、咲く花もあり

身を縛らるゝ、時もあり

見なば直に、適したる

されば勵みて、能力を

今木の種は、蒔かれたり

子供ご母に、幸福の

美しき花を授くべし

●幼稚なる園丁

(第八十二三ページ)

左手の指を褶むで花の形を作り例へば百合花に擬し右手の指を攪み合して水壺を爲し拇指を以て水壺の口に擬しそれを以て花蕾に瀧ぐ状を爲し之れと同時に漸次に左手の指を開て花の自然に開き来る状をなすべし。

一たび此遊戯を小兒に示せば直ちに之に摸すべし。兒童は母が其子を愛するの情に迫られて爲す所の事は何事にて好んで之を摸擬するものにして此小遊戯の如き亦大に兒童を娛ましむるものなり。兒童の有する摸擬の能力は母たるもの十分に注意して之を發育せしめざる可らず、母にして能く之を爲す時は既に其兒童教育の半を成就せしものにして、後日百倍の重みある言語を以てしても尙ほ其驗を見るに難き事も今は羽毛の輕きを以て十分に其効あらしむるを得べきなり。今

此事を忽かせに爲し爲めに後日幾多辛楚の経験を嘗めて後始て余の言の眞なるを覺るの愚を爲さず、今に於て早く我言の決して誤謬ならざるを信ずべし、何となれば斯の如く辛楚なる経験により卿自ら是等の智見を得るゝするも、かくては既に兒童教育の時期に後れ卿が辛ふじて得たる智見は適々以て卿の悲痛を増すの具となる外何の用をもなさざるべければなり。

夫は儲置き我儕は彼の小園丁の事を忘る可らず、彼童男童女が花園を作り花卉を弄して娛樂する有様は實に愛らしきものにして忘れんご欲するも忘るゝ能はざるものありて存するなり。

「看護」養育是れはこれ我儕相互の交通に關しても我儕が兒童の生涯に關しても常に用ゆる所の詞なり。此等の詞は愛子の生涯に最も重要なものなり。我儕は何物を以て我儕の兒童に與ふべきか。思慮、堅忍、勇氣、即ち生命を養成す可き勇氣、これに達するの道程を示す可き方便は兒童に與ふ可き最も重要なものに非るか。母も父も此等の詞を反覆せざる可らず。我儕は既に之を爲せり。卿等他年老衰の時

に至らば今日卿等の恩に感じたる兒童が懇切周到に卿等を看護するに恰も此圖中の小兒が全く一面の識もなき老翁に有らん限りの親切を盡すが如くなるべし。然れども適當に養育の道を盡さんには宜しく時と處を考へざる可らず。直接に其根に灌溉することは凡ての植物に適するを謂ふ可らず、百合の如きは若し直接に其根に灌溉せば忽ち枯れ萎むべし。余は眞實に信ず園中に立てる思慮深く見ゆる小さき女園丁は我儕に告げて「汝の植ゆる所の場所を考へよ」「云ひ遙か隔りたる丘上の風車は風のまにまに軽く旋轉しつゝ、時を考へよ」と告ぐるの風情あるを、

土さへ裂くる、炎天に 水打ちそゝぐ事なかれ  
葉は枯れくになりはて、 外より與ふる養分も

取りて消化する力なし  
結尾に臨み更に一事の考ふべきあり  
いと美しくしき花園の 草木に培ひ、水まきて  
育つるに越すたのしきは 又どこ何處にあるべきぞ

枝を集めて、小屋を建て  
 人形をねせて、うちまもる  
 土かひ水まき、育てたる  
 花は自由に、咲き初めぬ  
 刺ある草木に、至るまで  
 今ぞ感謝を送りける  
 學ぶべきものは、何なるぞ  
 一をも失ふことなかれ  
 其快樂の幾分を  
 心にこめて、學べかし  
 小兒の體と、心を  
 心つくして、撫育せよ  
 子供の能力を、圓滿に

寢籠の中に、子供等は  
 勞力空しからずして  
 吹きくる風にはひ來ぬ  
 美花を結びて、園丁に  
 かくて之より、兩親の  
 子供の如く、樂みの  
 子供のなせる、業により  
 いかに分ちて得べきかを  
 よき花園に、家を建て  
 害する危難を、防ぎつゝ、  
 特に神より、賜はりし  
 發達させて、残すなよ

父の愛もて此賜物  
 其忠誠の功により  
 招く聖意に、よるならん

子供に賦與したまひしは  
 遂に子供を、天國に

●車匠 (第八四五ページ)

半ば握りたる兩拳を垂直に立て而して交互上になり下になる様に半圓形を畫きながら水平の方向に之を動かすべし、さらば孔を穿ち居る車匠の腕と手との運動に擬するを得べし、斯くて「絶えずぐるぐる」回轉す」と唱へながら車輪の回轉するが如く兩拳を縦に回轉すべし。

「凡て人間に關するもの一として汝に關係あらざるはなし汝は人なり故に苟も人間界の出來事は一として汝に知られざるものなし」は是れ明智者の至言なるが兒童は常に此大なる眞理を實踐するものなり。

大人の間に存する事は一として兒童の注意を惹かざるはなし就中特に其注意を惹くものは手工なり我儕は既に人の手工の如何に重要なるかを述べ其幼時に當り夙に之を重んずるの思想を養はざる可らざるを説きたり。手を以て製作することを好むの情を十分兒童の心裡に發達せしむべし。

子供の生涯を、活潑に

又勇敢に送らさんため

幼稚き時より、其心を

務ご業ごに、注がせよ

力ご心の、いごつよく

熱心ふかき働は

遂に望の、目的を

成就させつゝ、よろこびご

平和を受くるに、至らせん

もしも子供に、よろこびご

此平和ごを、得させなば

働いよく、勇ましく

正しき道に、導くは

いごく、安き事ぞかし

而して此遊戯は此善良なる目的を達するに於て幾分の補益あるなり。

畫師は兒童に快樂を與へん爲め丁寧に此圖を畫けり。圖の左方にある手車の車輪

を始めとし右方なる貨車さては上方なる神々の戎車の車輪に至る迄所有車輪の用方ご其特殊なる種類ごは悉く此に網羅して遺すごなき蓋し畫師は車輪の人生に重要にして決して缺く可らざるを我儕に示せり若し車輪微りせば人類の文明今果して何の處にかある可きか凡て車輪形のもの、能く兒童の心を惹くごは最も確實なる事實なるが實に彼等は後年に至り車輪の性質、用法、回轉等を考察して大に知得する所あるものなり彼尨大にして容易に動かし難く見ゆるものも僅小の動力を加ふるに由りて忽然動き始るは是れ車輪の効用にして兒童が年長者の忠告に従ふに於て甚だ逡巡するの狀に頗る異なるものあり蓋し兒童が車輪を見るの始めに當り一見其勢力ご重要ごを發見せざるが如く始めに當りて亦未だ直ちに其忠告の勢力ご重要ごを認識せざるなりされども年長者の忠告の能く兒童を進行せしむるの勢力は恰かも車輪の車に於けるが如きあるは兒童の遂に覺り得る所なるべし。

此の如く車輪の性質ご其用法ごに圓環花環等ご同じく標號的の意味に於て兒童

の心霊的の事情に從て能く教訓を覺知し易からしむるに重要なり、畫師は正しく此事を示さんご欲するなり、見よ二人の兒童の正しく相反せる方位に向て其輻輪を驅り而して其輻輪は一直線に其達せんご欲する所に達し、殆ど兒童の預想に反せるを蓋し畫師は此に由て大人及兒童の種々の運命は最上者の命令に據り各人の爲に最も善き所に導き至しめらるゝものなるを説明せんご試しに非るか、畫師が今又此に太古英雄の小説的時代を寫し出せしは如何なる意味あるか畫師は決して何の意もなく偶然に之を畫きしには非るべし。思ふに畫師は彼の天然の生命を種々の點に於て忠實に思索し其中に存する善良なるものを能く保存する所の兒童に由りて高尚なる英雄時代が更に新鮮なる面相を以て再現せらるゝならんご預想せしものに似たり。

圖の右方の下に車輪を回轉し來る車匠は凡ての兒童に何を教ゆるか彼等能く自ら保持して倒るゝご勿れごの事を教ふるなり。

(原圖には古代の小説にある神人の戎車を畫けり)

### ● 小木匠

(第八十六七ページ)

此遊戯をなすには先づ兩拳を垂直に立て斯くて鉋を引く如く始めは短く次第に長く「テーブル」の如き平面上を滑動せしむべし。

此簡單なる遊戯の深意は何の點に在るか音調の數と運動と相一致することは兒童の既に「指ピヤノ」の章に於て學びし所なるが、此の如く音調は數、時、空間、運動と内部の一致あるの外亦無聲の形及び特に物體と親密の一致ありて存するなり。若し物體長く伸張せらるゝごきは其調自ら深く、且つ精微に、短く引かるゝごきは其調高し。時間と空間に於ける長短の對照と其關係との概念は兒童の生涯に於て最も重要なものなり、「汝は暫時戶外に遊ぶべし、併し長遊す可らず」汝は運動せざる可らず、併し唯暫時などの如く母は長短につき種々の方面より小兒に之を理會せしめ二個の觀念の種々なる意味を知らしむべし。此遊戯と歌は之を爲すに善き機會を與へ、且つ前に出せる圖と遊戯とが曲直の理會を與へたる如く亦兒童の前途の爲めに長短の意味を明にするものなり。かの前出の遊戯の圖に於て我儕は到る處

に曲直の表出せらるゝを見而して此圖に於ては亦長短の圖解を見る。兒童をして試みに娛樂の爲めに此二圖に就て類似と相違との點を見出さしむべし。此圖は又兒童を導て外觀の大は必らずしも内部の大を預表するものに非らず、外觀の小亦必らずしも内部の小を預表するものに非らずこの觀念に達せしむるなるべし。此觀念は亦軀幹魁偉なるゴライヤスと兒童の親愛する短小なるダビデとの物語に由りて提起せらるべし。若し我儕にして我儕の兒童の感情を純潔ならしめ而して之に由りて我儕の心中に同じ感情を保たんを欲せば我儕は平和と神聖を我心の中に抱持せざる可らず、さらば我儕に祝福ある亦疑ふ可らざるなり。

● 武夫と善き兒童

(第八十八、九ページ)

兒童を膝蔽の上に凭らしめ左手を以て柔かに之を抱き唱歌の續く間之に和して右手の指を小指より拇指迄逐次に動かして兒童の方に去來せしむるときは騎士

の鐵蹄を踏鳴らし來るに擬するを得べし。

此遊戯と次ぎの遊戯とを以て我儕は兒童の心智品格及意志を形成するに於て一歩を進むることを得べし。此迄爲せし所の事は凡て不定にして偶然なるが如く兒童に見えしなるべし。雖も今より爲す所の事は一層明白なる智覺を以て爲さるるを以て亦極めて精確なり。

其不羈獨立なる高尚なる風姿と確乎不拔の勢力とを以て夙に童男童女の心を吸引して離るゝこそ能はざらしむる武士は實に彼等の心をして快然たらしむる完全なる理想の美なり。武士の鼓吹せし感情と其小兒に附與せし理想とは兒童に重要なる事を説明するに於て比類なき價值を有するものなり。此遊戯と歌及武士等の詞は彼等が兒童を鼓舞して達せしめんとする目的に向て第一歩を着くるものなり。

然れども題詞は我儕に警告して此遊戯に就き注意すべしと云へり。區別の感覺は比較と思慮とに由りて兒童の中に發達し始れり、此時に當りて兒童は動もすれば

將來に斯くなり得るご云ふ事ご、今彼が現に自ら斯く有るご云ふ事ごを容易に混同するの恐れあり。爲めに彼は將來に斯くなり得るご云ふ事を今既に自ら其如くあるご信ずるなり。是れ吾人が兒童は未だ之れにつき何事も了解し得ずご誤想するに由りて遂に此大過に導き至らしめたるなり。我儕は兒童を愛するのあまり兒童の今現に有るものご兒童の中に將に發芽せんごしつゝある尙ほ軟弱なる性質ごを區別せざるが故に、我儕の行爲に由りて兒童をして其將來成らんごすることごを今現に爾かある如く想像するに至らしむるなり。是れ實に我儕にも兒童にも大害あるごごなれば双方の幸福の爲めに十分に之を了解する様勉めざる可らず。兒童は實に他人の好意親愛注意及び賞讃に由りて善事を追及するの精神を喚起し得可きものなり。而して之を爲すには其兩親ご一致して共に之を追及せしむるを以て最も重要なる事ご爲す且つ彼が眞實に善良なるに非れば決して何人にも愛せられざる事ご感ぜしめざる可らず。而して此の如く兒童が他人の毀譽褒貶に意を注ぐに至らば苟も兒童の上に感化影響を及ぼすの位置にあるものは二事

の眞實に考ふ可きものあり。第一に兒童に對する行爲に於て兒童が將に有らんごすること及び有り得べしごいふごご、兒童が現に有ることご、を明白に區別せざる可らず。第二には亦兒童をして自己につき誤想を抱かしめざる爲めに明白精確に外觀及び人品を理想及び目的ご區別せざる可らず。此等の事を正しく理會することごせざるごごに注意して能く守ることご守らざるごは實に兒童をして將來唯外觀に馳する者たらしむるか或は實着眞身の者たらしむるかごの分岐する處なり。母は既に自ら愛らしき嬰兒の遊戯に由りて兒童の志望を養成發達するの力を有することごを知りしなるべし。兒童將來の生涯を滔々汨々たる長江大河に比するごきは今は尙ほ涓々たる溪流のみ。其水をして西流せしむるも將た東流せしむるも一に母の撰ぶ所に在り。然れども其既に長江大河ごなりて後は如何なる外力も之を奈何ごも爲す能はざるなり。

其他尙夙に兒童の心に啓發す可きものあり即ち善を尊重し之に達せんごする勵精是れなり。此勵精は徒らに抽象的の善を尊重するに由らずして親しく目撃し得

る隣人の善事を尊重するに由りて喚醒し得るものなり。兒童の正當と認め功績ありと信ずる所にして而かも勵精すれば達し得らる可き他人の行爲を尊重し、之を兒童に示すことは寛大なる競争心を刺激して大に兒童を興起せしむるに力あるものなり。

「母上よ、猛く雄々しき、武士が 歌ふを聞けや、あの歌を」

「をさな子よ、さくこゝに來て、更に又 聞けや赤子の、一曲を」

こけの褥に咲きにほふ

薔薇の如く、母人の

衣の下に、包まるゝ

子供の姿は柔和にて

満面無邪氣と、喜樂もて

満たさるゝこそ、かはゆけれ。

なぜに此兒はかく強きぞ

ながき手腕を動かして

つくりたてたるものにより

思慮と強力を養へばなり

もし地に落つるものあれば

屈みて之を、拾はんこ

樂しげにこそ見ゆるなれ

天の使は幾度も

小兒の友となりつるか  
頬と額に接吻し  
子供より母に打注ぐ  
これこそ山なす慈母の恩を  
「母上我身を伴なへよ  
あちらにこちらに飛びかけり  
再び母のふところに  
腕にだかるゝ子の身には  
小さき足はくたびれぬ  
眼もつかれて、ふさがれぬ  
されども母は、たのしげに  
子供は寢籠に打臥して  
日々つかまりて、幸福の

母の愛こそ天使なれ  
接吻をもて、之を祝す  
其接吻と愛の雨  
よろこぶ心の感謝なれ  
無限の愛よ、母上よ  
子供は母より離れたり  
息はんためにかへりたり  
更に危害の憂ひなく  
されど今よく寝入りたり  
なほも唱歌をつゝけたり  
かたく横木をにぎりたり  
遊をするもこの横木



母は子供の身を祈り  
 寝る子の笑顔を、母は見て  
 天使の来りて、子の寢床  
 母はしづかに云ひけるは  
 「我兒よねむれ予もまた  
 睡りは母と我子供

衣を之に打かけぬ  
 天使の保護ある事を知りぬ  
 扇ぎ守るを信じつゝ  
 眠くなるまで疲れたり  
 めくまん爲に、来りしぞ

●武夫と悪童

(第九十九十一ページ)

此遊戯の外相は前章の遊戯と異なることなし。人往々遊戯に由りて兒童の争論  
 乖癖及び強情を驅逐し其泣き喚ぐを静めんを欲するものあり、此の如き方法の成  
 功するところは極めて稀なり。然れども人の此の如き事を試むる所以のものは亦多  
 少の眞理ありて其根基ならずんばあらず。兒童の不安、争氣、乖癖、強情は往々身體

の不適よりするに非れば心意の極めて偏癖なる作用より起るものなり。而して斯  
 る性癖は到底小兒自身の力に由りて其桎梏を破壊すること能はざるものなり。故  
 に斯る性癖の發作を一變せんを欲せば十分の注意と看護とを以て小兒を助けざ  
 る可らず。之を爲すには其外觀能く兒童の注意を惹く可き全く意外にして目先變  
 りたる物を捉り來り、兒童の眼を急に之に轉ぜしむるを以て最も善き方法と爲す  
 去迎兒童の涕と叫とを止むるものは敢て全く新奇なる物に限らず、否、斯の如き  
 ものは反て往々其叫びを烈しからしむることあり。蓋し兒童の心を轉じて其怒を  
 忘れしむるものは寧ろ意外なること俄然たること特に視官の強き感動に在るな  
 り。例へば甚だ怒り易くして頗るなだめがたき兒童も薄暮不意に月を指示すか、或  
 は他室に伴ひ行くときは忽ち穩靜平和に復するものなり。晝間に在ては不意に或  
 る活動物例へば雛の如きものを示すか若しくは意外に其境遇を轉ずることは皆  
 同じ結果を見るを得べし。此遊戯と歌とは實に此二者を并せ用ゐたり。何となれば  
 是れ亦前回に於て既に形貌と詞とを以て兒童の注意を擒にし得たる武士を以て

再び始められたればなり。  
題詞と歌とは自ら明白に此の遊戯の精神を示すが如く又容易く自らの説明を爲せり。

前章説明の結論は亦此章にも適用するを得べし。

●武夫より隱匿 (第九十二三ページ)

此小遊戯に於ける手指の用法は前章と異なることなし、此に母と其兒とが學ぶべき第一の事は兒童を匿くし或は兒童をして自ら匿れしめ若しくは少くとも匿るゝこと云ふことを意味す可き種々の方法に在り。此遊戯の中に存する精神は前章と異なることなく小兒と他の人々との内部心靈的の一致に立入り其一致の發達養成を謀るものなり。而して此精神は母と兒童との心靈的一致を更に感じ易く知覺し易き様説明することに由りて一層深く兒童の内部の生命に立入るものなり。此

一致の知覺と感情とが成る可く同一の媒介(此處にて)を通過し來ることは母と兒童との心靈的一致に最も重要なることなり。若し否らざれば母子間の關係は徳義上に非らずして單に肉體上及び智力上の關係のみとなり困難と禍害とは遂にこれより胚胎す可きなりこれ實に避けざる可らざる事に非ずや。

既に前章に於て此思想に觸着し數次遊戯の歌に於て之を説明せしにも係らず、今又此に教育家の本分として決して看過す可らざる一の思想あり、母たる卿と其愛兒との極内の關係即ち兒童の性質、生命及其傾向に關する卿の意見是なり卿は自己に對し家族に對し特に其兒童に對し如何なる行爲を現はすか、たゞ其兒は尙ほ幼稚にして未だ何事も了解する能はざるが如く見ゆるも母の一舉一動は兒童教育に於て實に幽微にして而かも有力なる方便として甚だ重要なるものなり。母は子にして子は母なり兩親は屢々其子に由りて示さるゝが如く互に一體にして又其子とも一體なり。宜しく此等の語中に含蓄する深意を熟考すべし。母たるものは其思想を單に感情の區域にのみ限らずして宜しく之を智識と確實なる實行に

迄擴充すべし、蓋し感情は誤解に由りて其適當なる範圍を超ゆるものにして利なくして反て害となることあればなり。

「母よ此武士は何故に汝の兒を得んと欲せしか。」「彼は愛らしき善良なる兒童なるが故に武士は之を得んと欲せしなるべし。然れども汝の母も亦同じ理由に由りて彼を寵愛し武士に與ふることを好まざるなり、否な武士に彼を示すことさへせざりしなり、何ごなれば

かゝやける子よ我ちこよ

汝をば深く愛すなり

汝をば高くあがむなり

神は無上のよろこびを

我等の上に賜ひたり

にこらぬ心の愛さ善

汝が精神に有らなば

互に愛し愛さるゝ

其結ばりは何時までも

解くることこそなかるらめ

もし武士がこゝに來て

我子を得んといふならば

「いや、我子は與まじ  
「汝もし我を愛しつゝ、  
母上我は善良に

決してやらぬ」と答ふべし。  
また親切にあるならば  
永く御身を離るまじ」

● 迷藏

(第九十四、五ページ)

既に前に述べし如く母の胸又は頸或は外衣の下若しくは膝蔽の中に匿くるゝ遊戯が常に新鮮にして興味盡きざる快樂を小兒に與ふることは人の皆よく知る所なり。此興味不盡にして決して變らざる心の傾向と幼稚時代の元氣の富盛とに由りて之を觀れば迷藏の遊戯は小兒の教育と發達とに最も重要なものなりとす。然れども母の心情生命及び動作と小兒との本來自然的の一致が往々誤解せられ其正當なる限界を超ゆるに由りて反て母及び兒童に害を及ぼすことあるは前章の遊戯に於て既に認識せし所なり、若し一致にして誤解せらるゝとさきすら尙ほ斯

く多少の害ありさせば況して隔離の場合に於ては其誤想誤解及び不明了等に由り來す所の害果して幾何なるべきや推知するに餘あり。此理あるが故に母は兒童が斯く喜ぶ所の迷藏の遊戲に由て隔離に對しての第一の動機を知らず識らずの際に兒童の心に挑發すべし、此れ善き事なり。唯母は兒童を養育する際に當り總て與ふることは受くること、離る可らざるの關聯あり而して之を始むるには先づ受くるよりせざる可らざることを能く感知せざる可らず、卿は迷藏の遊戲に由りて之を熟知するなるべし。故に母は母たるの愛子を思ふ熱心さを以て隔離に對しての動機を挑發することを明了に認識せよ。小兒は己が身を匿くして母より隔離することなす、彼は母が長く己を見出し得ざる様に匿くれば由て以て母より隔離せんことを好むことを漸く學び始むるなるべし。此處こそ是危險の端の伏する處なれば小兒をして隔離を以て快樂となし、益々母より遁匿するに至らしめざる様善く注意せざる可らず、否らざれば竟に母が全く彼を見出し得ぬ程に自らを隱匿すること好むに至るの恐れあればなり。母は其兒が益々發達するに

及んで遂に其實情を人品をも隠蔽せんとするに至らしめざる様注意せざる可らず其唯自ら匿れて樂しまんごするのみなる純潔なる遊戲の願欲の中に不知不識隱蔽を好むの動作が加はらざる様注意する所なかる可らず、是れ實に危險の萌芽なればなり。我儕は此危險に關して多言するを好まず、然れども亦十分に之を明知し居らざる可らず。此危險は兒童の稍長ぜしとき己れの動作を隠くし又は其動作に現はれたる自己の本質をも蔽はんごすることを存し、特に其動作の露顯するごきに母より正當なる懲罰を蒙むるのみならず、或は不當なる譴責をも受んかを恐るゝごきに此危險に陥ること更に多しご爲す。去ながら我儕は徒に母の心を傷めんごきを恐るゝが故に以上述べ來れるが如き正眞の事の不正の方に縮けて發達するの醜事を此上更に指點する事をなさず、寧ろ如何にせば小兒の快活にして穩靜なる發達を全然相和する所の此無害なる遊戲より此等の惡結果を避け得べきやごの間に答ふるごを爲すべし、其答て他の奇あるに非ず唯宜しく此遊戲の主意を小兒の之をなす方法ごに注意すべし、さらば容易く其方便を見出し得可

しこいふにあるのみ。小兒が其身を隠くすこき卿は宜しく其全性質を観察すべし。彼れは深く自ら隠くすこ雖も其全心の注ぐ所は彼が再び母を見母が再び彼を見んことを欲するに在り而して彼れが再び其母を見出せしこきは彼の眼の如何に喜悅の色を以て輝くかを見よ。併し何故兒童は常に自らを隠くすを好むか、彼は常に母の腕に抱かれ母の膝蔽に坐し母の胸に憑り、絶えず互に相見るを得るなり、さらば彼は自ら隠くれて母より、隔離し居らん爲めに斯く自らを隠くせしか。決して然らず、彼の自らを隠すは他なし、母と内部の一致あるを喜ぶの情あるこ全く此一致を自覺するに至るこに由るなり、即ち常に再會の豫樂を享受せん爲めなり。見よ彼れが母より隠くるこ長く且遠くして其喜びを得るここの多きに從ひ其内部一致の感情を醒覺増加するここの愈大なるを。ア、母よ前に述べし危険を避けん爲めには心して彼れが再び母を見出し再び母に逢ふを喜び又再び母に見出されんことを欲するの情を養ひ長ぜざる可らず、思慮あり純潔にして献身の精神に富める母よ斯の如き危険の存する點こそよく利用すれば却て大なる助の出

づる源なれ、斯の如きは蓋し神の世界に於ては到る處に行はる、妙法なり。即ち前述の如く外部の隔離の大なるに從て内部の一致は益々増加し遂に一見すれば不幸の至大なるものこ見ゆる困難の處が反て聖潔、和合、平和、喜樂の處となるに至るこごあるなり。

一時の別れは又逢ふため      たのしき一致ぞ我目的

母よ此理をよく學べ      子供の看護は天福の

汝が身に降る種ぞかし

● 杜 鵑 (第九十六七ページ)

唯此遊戲の外相をのみ考へその小兒に取りて深き意味あるこごに思ひ到らざる人は恐くは言ふならん、何故に此杜鵑の遊戲を爲すか、杜鵑と云ふの外迷藏の遊戲と何の異なる所あるか、然り實に其内面に於て二者互に相關聯する所ありと雖

ども此遊力を以て迷藏に比すれば更に一段の進歩あることは兒童遊戲の順序に於て杜鵑の遊戲の迷藏の遊戲に次ぐを以て見る可きなり。然らば二者の異なる所は何くに在るか此遊戲の一段發達せし所の性質は如何。若しよく十分に小兒の遊戲に注意するときは容易に其相異なる所を發見するを得べし。即ち第一には隔離と一致とを一層判然と現はし兒童をして益々明白に二者を自覺せしめ、第二には二者を杜鵑の叫聲に由りて交雜せしむる是なり。此遊戲中に含蓄せられたるものは隔離中の一致、一致中の隔離なり。隔離中の一致と一致中の隔離との自覺感情は深く人心に存する所の良心の基礎なり、而して此の良心の喚聲は現に此杜鵑の遊戲中に既に兒童に聞ゆるなり良心の靜肅なる喚聲は一たび交感すれば其感情と自覺中に於て決して再び隔離す可らざる最高き神との交通なる心靈の一致の預覺にして、健康、幸福、平和、喜樂は實に其生涯を貫通して此預覺の發達する兒童に在て存するなり。於是て母の頭の上に在る圖の如く生命の太陽は恰かも母と二人の兒童とを更に高尚なる光の中に相合せしめんとするが如く赫々として昇りて

決して再び没することなきなり。

小兒曰く「母上、何か私のさだかに知り得たることありや」と母曰く「汝の内心の聲に傾聽せよ、そが教ふる事に一として眞理ならぬはなきぞかし。其内心は教へて曰はずや善は内心の喜を來すものなることを其所謂内心の喜とは何か考へ見よ、又告て曰はずや汝の父母の深く汝を愛し居ること、及神は汝の父にして汝の心に住み玉ふことを去らば愛と眞理と感謝とを恒に保ち得んために心の中に此知識を潔く養ひ育てよ。」ア、母上よ、母上よ、兒は今や確に知り得たり、行末永く失せざるは子供に於ける母の愛なることを。

●商人と娘及商人と童

(第九十八—百一ページ)

此の遊戲に於ける手の姿勢はいと容易にして又一般に人を知る所なり、而して圖畫も亦頗る明瞭なり、左右兩手の三指其指尖相觸るゝものは商店を表はし、自由に

動くを得る左手の小指は店頭に立つ所の商人に擬し、右手の食指は左手の食指の下節の上に置かれて帳臺と爲り、二本の拇指は貨物臺の前に立つ二人の顧客なり此二人の客は第一圖に於て母と小女、第二圖に於ては父と兒童となり。圖に於ては二個の食指互に相重る。雖もこれ必ずしも必要に非ず、唯一指にて十分なりとす。凡て通常生活上の事は市場の事に至るまで皆各其法則あるものなり。小兒及び大人が自ら明白に自己の中に此等の法則を發見するときは亦喜んで人間生涯の市場に入り音に自己の需要に關してのみならず亦人類一般の需要に關し、音に外面の關係に於てのみならず亦内部の關係に就て夥多のものを齎らし來り而して恰かも鏡に寫し見るが如く人類百般の生産と需要の中に生命を發見し成し得る限りは此反射の結果に照らし音に生活上必須のもの、みならず亦其心に快樂を與ふるもの、及音に外面人意に適するのみならず亦内實より眞に人を喜ばしむるものを撰擇し、以て之を我有と爲すを得可きなり。此内部の宗教的喜樂はたごひ小さく見え又之れに達すること稀なりとするも實に兒童が屢々市場に往來するこ

こを好む所以の理由にして其多般厯雜なる性質の中に潜んで存する兒童内部の喜樂の基礎なり。屢々市場に往來する所の者は能く家内の生活に必要な美麗にして且有用なるものを撰ぶを得るなり。小さき娘若き婦人家の母又は妻は能く精緻なるもの、有用なるもの、其他總て生命を保護するに必要なものを擇び、童男少年、大人又は人の父は力あるもの、強きもの、善は常に有用と伴ひ、美も亦た有用より生ずるものなり。硬軟強柔は最も美しき生命調和の中に結合し内部一致の花は或は併立し或は分離して互に其關係を表示する外部の均齊一致より咲き出るものなり。

外相の中に内包を察し、分離の中に一致を悟り、複雑の中に一致を見、特殊の中に普遍を求め、圖畫の中に生命を覺知し、又其反映に照して自己を見、更に進んで外部の生命を知ること、を學び、由りて以て内なる獨自己を顯はすの方便を見出すこと、是等は實に小兒が市場に行くとき感ずる所の無意識誘引衝動の基礎たるものなり。兒童は僅かのものを買ひ得て家に歸り、其物の人形なる、馬車なる、横笛なる

と羊仔なることに係らず、之れに由りて自己及び自己の世界を活如として現はし得るに於ては實に満足を感じずるものなり。此故に市場に往くことは大に兒童の開發に力強き刺衝を與ふるものなるを知るなり。

子供と共に市に行き  
皆將來の好結果

見るものも又買ふものも  
生ずるたねならしめよ

●會堂の戸及び其窓

(第百一、二ページ)

兩前腕を成る可く眞直に立て、戸口の柱に擬し、兩手を互に相傾け、其項上にて相合せ以て「アーチ」を形くり、一手の四指を他手の四指の上に少しく開て戸口の上なる窓を示し而て二本の拇指を立つるときは宛も小さき鐘樓の如く見ゆるなり。總て兒童の外に現はるゝ自由の動作は皆是れ内に在るものゝ標號にして外觀は即ち此内面の存在を解明するものなり、故に人の心を惹く可き心内の愛嬌は總て

純潔なる兒童の面貌に溢れて輝くなり。

凡て小兒は凡そ複雑なる生命の中に(其誤り易きにも係らず)無意識に模糊として預知し且つ求むる所のものにして、若し己れに生命の一致と調和を示すときは益々深く之を感じ更に之と一致して存せんことを欲するものなり。思想上の集會と評議會とは此思想即ち前既に説明したる所の發達の新階級に於ては力を盡さずしては得難き所の此思想をば小兒に與ふるの端を爲すなり。是故に總ての集會特に大人の集會は大に小兒の心を惹くものなり。故に亦此集會が心靈上の深意を含み生命に關涉あるときは彼等は其家族と共に教會に行くことを強く好むものなり。屢々會堂に行くときは小兒の心靈次第に發達し遂に會堂に往くことを以て眞成の喜びと爲し時間の長きをも覺えざるに至るなり。此喜悅の原因は説教の言語にも非らず、又讚美歌の詞にも非ず、唯多くの大人と趣味を共にし、其或は語り或は歌ひ或は爲す所の事柄に己も與るを得ることの事實に在り、是れ其心中に在る預覺志望感情生命等を幾分か説明して之を確乎たらしむるに由るなり。



然れども此等聞きし所の説教の言語及び其意義に關しての疑問は兒童の經驗感情及び其意見の範圍以外に出で、了解す可らざるときは其心靈の發達と心靈必要の増加とを待て答解せられざる可らず。此遊戯の歌は即ち之れが説明なり。此歌は小兒の發達に於て二つの判然たる段階を示せり。曰く近日く遠日く早日く晚日く。此の如く慧敏なる母が是迄説明し來りしものを査察し其中より小兒の發達進歩に最も善きものを撰ぶは作者の偏に希ふ所なり。然れども其中最も重要な一事は直ちに小兒の衷心に語り其中に生命の基礎泉源即ち總ての生命の生命總ての光の光總ての愛の愛總ての善の善なる神との相合一致の思想を反響せしめ以て小兒の有する預覺を成就して益々之を強固にする事是なり。

## ●小兒の繪

(第四百一六ページ)

小兒を膝の上に坐せしめ母自身の右手の食指或は小兒の指を以て空中に簡單な

る見易き形を畫くべし。小さき板の上に薄く砂を敷き其上に畫けば更に善し兒童が十分に成長せしときは石盤の上に畫かしむべし。或は砂より始めて石盤に進み終に空中に唯外形を畫く様順次に進む可なり。此等の方法は皆眞理に基くものなり。空中に畫くことは明確なる運動にして而かも十分意味あり。こして既に兒童に喜ばるゝものなり。繪を畫くことの甚だしく兒童の心を惹き其甚だ愛好する所なるは是れ實に兒童の心中に在る創造力の第一着の表明にして又割合に簡易なる表現法と見ゆればなり。蓋し彼は既に自己の中に複雑を養成し、複雑なる一致の中に個人を生命を見るに至り而して此の如く既に自己の中に一小世界を形成する。共に自己の力に相應なる容易き方法を以て此世界を表現せん。欲するなり。繪を畫くところは亦知覺より再現に向て一步を進むるものなり。小兒は其既に知る所の種々の物を或は査察し或は分類して之を畫き以て觀察に便にし將來生存に優りて重要な一事あり。即ち夙に造物主を認識したる者は有意識に善を表現

する爲めに其賦與せられたる創造力を用ゆることは是なり、何となれば善を行ふは受造物と造物主との間に存する紐索と謂ふべく、有意識に善を行ふは即ち自覺的紐索にして眞に完全なる神人の一致、即ち神と一個人及び全人類との一致なればなり、故に此一致は總ての教育の起發點にして又其恒久の目的なり。

●表紙にある二圖の説明

(譯書にては卷首目錄の次にあり)

母、母の愛、母の全性及び母と其兒との内部の一致は是實に人間教育の唯一真正なる發端にして又最も純潔なる源泉最も確乎たる基礎なり。蓋し小兒の最も幼稚なる時より夙に其男たり女たる個性特色を曉る者は彼の無私無我の思想と精神とに満ち、神と一致し人間の此兩面(男女)を均しく愛する所の母の外なければなり。故に表の表紙(此譯書には卷首に收めたり)には母が人類の蕾なる童男童女を優しく其腕に抱き愛らしく其胸に凭らせ居る圖を畫けり。此母は其性質職分及び地位を自覺するものこ

して表はされたり故に其頭に櫛の枝の花環を戴けり。童男は其自然に有する男子たる精神に由て動れしもの、如く外方に身を伸べ、又一切の事物を聯結する所の内部一致の感覺を既に予想せしもの、如く球をつなげる紐を手にて持てり。此の如く彼は其少時に於て既に人生の勵精及び其結果を示せるなり。

眞理は深き海に住み

一致の中の潔白も

亦是れ深き海にあり

もし健康さへ常ならば

たしかに目的を達すべし

童男が其男兒たる性質を現はして母の腕より活劇の世界に伸び出る如く少女は亦まことの娘の如く恰かも心と心と結合するばかりに緊密に母に抱きすがり而して十分に母の愛と誠とにたよりながら其安全の場所より小兒らしき無邪氣と直實なる眼色を以て今母が歩み行く所の刺ある薔薇の花を撒き散らされたる生涯の道を眺め居れり。蓋し此道は他日彼女が一般に人たるもの、達す可き彼岸を目指し進み行く時に當り亦自ら通過せざる可らざるの道路なり。母は自己の養

育の力によりてかくも其天性の相異なる二人の幼児を其豫め定められし目的に發達せしむることの極めて困難なることを深く感じ、斯くも相反せる性質を有する二人を産出せしめ玉ひたる人類の父に祈り其智慧と能力とを得んことを確信して熱心に天をながめ居れり。

斯くして兒童撫育の初に於て慈愛、信任、忠實の精神は信頼す可き盡力及び無私なる思想と相合體して現はれ而して神との一致も亦此に存するなり。

「母の愛母の歌及母の遊戯」兒童の生涯に於て此三者の養育は亦此遊戯及歌の書の特別なる目的なり。畫工は表紙の表の圖に於ては兒童最初の撫育の源泉たり、精神たるものを標號的に示し、裏表紙の畫に於ては次に兒童の達す可きもの、かゝる撫育の結果を察知し得可らしめたり。其畫景及び排置に至ても後者は全く前者と異にして、第一圖にては内部に養はれたるものを示し、第二圖にては既に養はれたる潛勢方の外に現はれて活動する模様を表はせり。母之を始め父之に次で更に進ましむ。母は先づ思慮を盡して養育し、父は強固に支配して之を活動せしむ。父

は其兒童を岩石路に横はり人跡未だ至らざる險阻なる生涯の高處に導き至らしむるを以て自己の責任と自覺せり。父は其胸中に靜かに動く所の愛心と勢力を蓄へながら仰て既に達せられし成功を深く謝し、母の祈禱の斯の如く十分に應驗ありしを痛く喜び居るもの、如し。又男女二兒の姿勢を視るに女兒はひたすら父に倚り縋り其導くまに、從ひ行くに反して男兒は父に挺んで、銳意前方に直進し行路の艱險を踏破て其最高頂に達せんとするの概あり。男兒の養育には最始より母の全力を要するが故に母は之を右腕に抱けり。父の務は之に反して夙に其男兒を導て生途の艱險に向はしむるの必要あり、故に之を導くに其左手を以てし、軽く其手を拉き成べく兒をして自己の力によりて進行せしめん。女兒に至ては則ち否らず、其齡漸く長じ未熟險難なる生途に向ふに及びては勇猛勁健なる父の保護を要すること愈増加するを以て父は之を健強なる右手に携へ、女兒も亦一意之に信頼倚任し其が導あらば如何なる難所をも辭せざるの心あるはその堅く父の手に縋り身を之に緊接せしめ居るを見ても明なり。父の有する精神は

その剛健確固なること恰も其頭上の蒼鷹の如く、生途の難に遭ふ毎に之を甲冑となして世の辛酸と戦ひ、以て其偉大活潑なる事業によりて人の父なる天の神に實行上の感謝を奉れり。蓋し彼はよく自己の高尙なる稟賦雄々しき強力及體面并に其尊貴なる天職を識認し常に其心に

「無私の心情明確なる思想及高尙なる行爲は人を爲る」

この眞理を服膺し、之を自己の前途に實現せんことを期するもの、如く確然として其生途を渡り居るなり。

更に二圖を併せ考ふるときは以て人間を代表するの畫圖と看做すを得べし。即ち父母が其兒女を得て明に自己の天分を識認し、平和喜樂自由を以て其目的となし無私の心情明確なる思想及高尙なる行爲を以て、茲に示す所の方法により、内外兩面の生命を撫育修養し以て其子女の教育を完成せんことを勉め居るものは是豈に人間の眞趣を示すの好畫圖に非ずや。

母の遊戯及育兒歌大尾

明治三十年三月廿五日印刷  
 明治三十四年九月廿七日再版  
 大正五年十月十一日三版發行  
 昭和四年十月二十五日四版發行

賣價金 參圓  
 郵税金 拾八錢

譯者兼著者 アンニー、エル、ハウ

和久山キソ 神戸市中山手通五丁目頌榮幼稚園

兒玉昱松 神戸市元町通一丁目二二九

頌榮幼稚園 神戸市中山手通五丁目

兒玉歐文活版所 神戸市元町通一丁目二二九



版權所有

發行者 和久山キソ  
 印刷者 兒玉昱松  
 發兌元 頌榮幼稚園  
 印刷所 兒玉歐文活版所

終